

CONCETTA LA MAZZA

青空の向こうへ



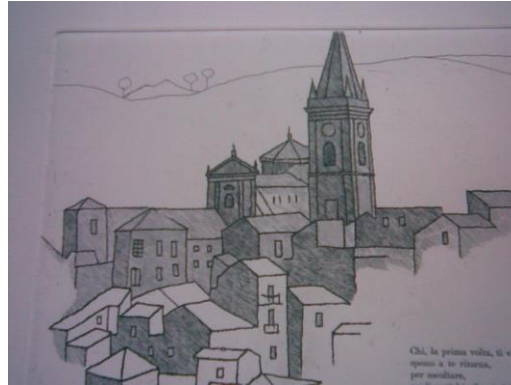
バイオグラフィー

コンチェッタ・ラ・マッツァは 1936 年にノヴァーラ・ディ・シチリアでドメニコ・ラ・マッツァとテレサ・コレンティの長女として生まれました。 1950

年、母方の叔母への「委託」という辛い時期を経て、彼女はドモドッソラの両親の元に戻り、現在も夫のジュゼッペとともにそこで暮らしています。彼にはアルマンド、ルチアーノ、ダニエラという 3

人の子供がいます。最近 ノバラで過ごした子供時代を思い出したいという圧倒的な欲求が彼の心に忍び込み、ここにこの親密で個人的な日記が誕生しましたが、街、田舎、人々、習慣といった当時の環境への逸話と言及が満載です。、第二次世界大戦の暗い時代にその領土の伝統。

書くことの根源的なエネルギー



小さなコンチェッタは叔父たちに預けられ、意志に反して町やクラスメートから遠く離れたカストランジャのあばら家で暮らすことを強制される。こうして彼は、戦争中の飢餓、時代の無知、迷信、虐待の間で過酷な数年間を孤独に個人的な十字路を旅することになる。戦後、避けられない移住と、当然のことながら困難な北へのスタート。

これらすべては、記憶の中で自分自身の成長の段階を再訪し、驚くほどの新鮮さと微妙な皮肉の糸で、私たちに、最終的に、私たちの家族共同体の象徴的な物語を読む喜びを与えてくれる少女の視線を通して語られます。私たちを深く感動させることができ、それは私たち一人ひとりに属します。

コンチェッタ・ラ・マツツアによるこの短編小説では、書くことはあらゆるルールを覆し、原点に戻り、形式的な図式から自由になり、難解な内なる活力によって動かされ、すべてを飲み込む激流となり、魂の豪雨となる。

叔父のアントニアとミケーレの姿は、ノヴァーラのイメージが忘れられないのと同じように、寛大で包み込むような甘さ、そして厳しさと厳しさの両方で記憶に残ります。

最後に、取り返しのつかないことが起こる思春期への困難な移行ですが、小さなコンチェッタは、その勇気と未来への揺るぎない希望、そして... 世界を見つめることができた目のおかげで、悲劇的な運命に屈しませんでした。空色！

NINO BELVEDERE



「私にとって試練が始まりました。おそらく暑い日でした。1938 年の夏が始まり、私は 2 歳で、叔母が私を迎えに来ました。彼女は布製の袋にブラウスと 2 枚のパンティーを入れ、私が家を出たことに何も気づかずにいました。私はまだ小さかったので、その日から私のヴィア・クルシスが始まるとは想像できませんでした。」

青空の向こうへ

第一章父の家



今ではクモの巣に覆われ、蛾にかじられた無人の古い廃墟となっているが、その昔、メッシーナの山中にある壮大な要塞の下にある町、ノヴァーラのエンギア地区の路地に家があった。噴水。正面玄関を開けると1階へ続く内階段があり、そこには木の板が張られた小さな部屋があり、そこが寝室でした。上の階に行くと、キッチンがありました。そう呼んでもいいかもしれません。片隅には、火が焚かれる石板と、パスタ鍋を置くために使用された鉄の三脚がありました。正面には真っ黒な壁に掛けてある、木製のシャベル、大小二つのふるい、パンを焼くためのオーブン、側面には半分腐ったチェスト、テーブル、二つの「フリッツィ」といくつかのガタガタした物がある。椅子。ようやく見つけた部屋には、路地を見下ろす小さなバルコニーが付いた部屋があったが、そこにはシングルベッドを置くスペースがほとんどなかった。その穴は1934年に未

亡人となった祖父が住んでいた王国で、階段の下には木の蓋が付いた石造りの便所が作られていた。下水道がなかったので、後者は放出される悪臭を軽減する役割を果たしたに違いありません。当然、この家には水道も電気もありませんでしたが、当時の男爵ですら得られなかった快適さでした。その隣には農場に通じる木の門があり、そこには鵜が沐の上に止まっていました。

世間から離れたこの片隅では、裁縫師だった母が祖父と同居し、年上の二人の兄と妹が結婚してノバラに住んでいた。私の母は金髪で、やせていて、体格がとても弱く、とても繊細な顔立ちをしていました。そして、乳のように白い顔で最も目立ったのは、二つの大きな青い目で、いつも怖くて悲しんでいました。おそらく、彼女が
24
歳のときに母親が突然亡くなったことが、彼女の身体的および精神的な脆弱性の原因だったのでしょう。

祖母の死から数年後、母は妻の一人の仲介のおかげで、チャーミング王子に会いました。私の父はバディアヴェッキアの貴族の出身で、タバコ屋と食料品を扱う居酒屋を経営していました。働き者の家族で、父は誰がどう見てもとてもハンサムで、背が高く、色黒で、自信に満ちた進取的な男でした。彼は垣から遠く離れた村に住んでいました。そこまでは歩いて、いいペースで30分で着くことができました。彼の父親は木炭を運んでいました。母親は舌癩な女性で、朝、タバコ、塩、食料品などの店で供給される商品を買うためにラバを連れてノバラに行きました。彼女はいつも首に大きな黒いショールをかけてエレガントな服装をしており、顧客に情報を提供するために新聞を買ったこともありました。それは集落で唯一の店であり、食べ物を与える口が8つあったにもかかわらず、その家は幸福に欠けることはありませんでした。

夜遅く、彼はワインを着色ソーダで薄めることで、ほろ酔いになった客と財布をこれ見よがしに助けた。子供たちは必ずしも親の仕事を引き継ぐわけではないので、父は靴屋の仕事を学んでいました。数か月続いた婚約の後、結婚したばかりの父と母は、エンギア地区の噴水の近くの家に愛の巣を作りに行きました。ちょうど9か月後、私はこの世界に到着し、南部の神聖な習慣に従い、父方の祖母であるコンチェッタの名前を名乗りました。若い年齢にもかかわらず、私は肌が

黒く、しわがあり、いつも泣いていました。うちにはベビーベッドがなかったので、祖父は一日中私を腕に抱かせて、夜は大きなベッドで父と母と一緒に寝ました。どう見ても私はとても醜くて耐えられないほどでした。数か月後、この国では仕事が不足しているのを見て、父はサルデーニャで働きに行くことにしました。彼が他の島へ出発するとき、彼は母親に、泣き叫ぶ赤ん坊と子宮の中で別の生き物を蹴りつけたまま残しました。

私が生後20か月のとき、妹のローザが生まれました。その名前は彼の母方の祖母の名前でした。コンチェッタと違って、やはり母によれば、ローザは美しく、白とピンクの肌をしていて、茶色の髪が調和のとれた顔を縁取っており、二つの美しい青い目で飾られていた。彼女の名前のように、花だったのだ！母がローザを腕に抱えて噴水に水を汲みに行ったとき、友人たちはどうして二人のまったく異なる娘を産むことができたのか尋ねたほどです。

この子、ルジーナ、はい、あなたはビリヤードでしたが、もう 1 つは..
この子、ロジーナ、美しいですが、もう 1 つは..
友達は唇をしかめながら言いました。一方、この状況で私は、試練の予感を感じ取ったかのように落ち着かず続けましたが、神に感謝して、たとえ諦めではなくても、試練は耐えられました。

残りの話をするには、まず、叔母のアントニア、つまり zì 'Ntuoia を紹介しなければなりません。彼女は私の母の姉で、二人の間には17歳の違いがありました。彼女は背が低くてふくよかな女性で、汚れた髪が目落ちていました。無視された彼の顔は実年齢よりも老けて見え、虚ろな視線には屈辱だけが残っていた。

20歳、当時結婚適齢期だった彼女は、未亡人で3歳の息子がいた、センピオーネトンネルでの仕事から戻ってきたばかりの従妹と結婚した。この男、私の叔父のミケーレ、叔父のミケーレは背が低く、ヴィットリオ・エマヌエーレ3世の平民のコピーのように見えました。彼は町の非常に特徴的な通りにある幅メートル近い階段のある彼が所有していた家に住んでいました。美しい家でした。

1階には大工の作業場があり、万力を備えた大きな中央カウンター、ヤスリ、ノミ、ギムレット、ガウジ、オーガーを保管する2つの壁キャビネット、彼が作ったテーブルの脚を丸くする旋盤、研削砥石がありました。鉋や刃物を研ぐのに使われたもの、接着剤を液化するための鍋が付い

た薪ストーブ、いたるところに積み上げられた板、壁に取り付けられた数本ののこぎり、蹄鉄やヤギの角、亀の皮などの縁起物、つまり、今では思い出の世界にしか属さないあの場所。

木の階段を上がると一階には、当時的高级品だったセラミックタイルが張られた広い部屋が二つあり、叔父が作ったサイドボード、ソファ、テーブル、そして野菜ロープの一種であるラフィアで編んだ椅子が数脚あった。

8月中旬、聖母被昇天の行列が修道院に向かって登っていくとき、通りを見下ろす小さなバルコニーからは、冠をかぶった聖母像の頭に手で触れることができた。しかし、二階からはロッカ・サルヴァテストが見え、目の前には家々の隙間から、青空の向こうにゆっくりと伸びる山々の素晴らしい風景が、特に海に至るまで見渡せました。霧のない涼しい春の日には、地平線の端にヴルカーノ島が見え、リーパリ島、ストロンボリ島、その他すべての島々が見えました。まるで色とりどりのポストカードのように輝く自然の光景です。

別の階段を二階に上がり、そこにはキッチンと寝室があり、最初の非常に広々とした階段には、パン用の薪オーブンと調理用の鋳鉄製の石炭ストーブが装備されていました。最も重要な家事を行うための排水溝付きのシンクがないキッチンの不便さを除けば、間違いなく美しい家でした。当時はまだ想像もできなかった便利なものもありました。実際、水は公共の噴水から亜鉛ホッパーに汲み上げられ、その後

2

階に運ばれ、そこで食器を洗うために大きなテラコッタ製の洗面器に注がれました。流しに排水口がなかったので、洗面器の水を1階に戻してトイレに捨てていました。女性にとってはとても疲れる仕事でした。人間のあらゆる我慢の限界に達した卑屈で屈辱的な状態は、夕食時に頂点に達した。アントニアおばさんは、夫への敬意から、以前に食べた皿から、そしておそらく名付け子も食べなければならなかったのだ。同じことを繰り返しましたが、はっきりした記憶はありません。

ミケーレおじさんは暗くて不機嫌な男で、愚かであると同時に勤勉で、心臓の代わりに砂岩の小槌を持っていました。私は彼の目に、他人に対する優しさや思いやりの輝きを一度も見たことが

ありません。彼女は息子の世話をするために叔母を家に残し、息子のために食事を用意し、息子の使用人として行動し、常に「はい、はい、はい」と言わなければなりません。バルコニーの外を見ることもできず、そうしないと大変なことになるため、ほぼ毎晩、仕事が終わると友人たちと居酒屋に飲みに行っていた。

彼は、近くにいてもできないほど臭くて、汗だくになりながらよろめきながら家に帰った。その代わり、叔母は石油灯のそばで、夜遅くまで食事も取らずに彼を待っていました。小さな王様が戻ってくると、多くの場合、階段を登る気力さえありませんでしたが、疲れ果てて、埃っぽい作業台に身を投げ出し、酔いを覚ますために一晩中そこに留まりました。アントニアおばさんは、いろいろあったにもかかわらず、彼にオーバーを着せ、愛情を込めて彼の隣に座って朝まで見守ってくれました。それで何年も経ち、多大な献身と引き換えに、彼女は場面を避けるために親戚を訪ねることさえできなくなった。嫉妬深く、狭量で横暴な彼は、彼女が家から出られないようにするために、かがり糸、櫛、ヘアクリップなどを買いに行きました。結婚式に招待されたとき、ミケーレ叔父は最後の瞬間まで家に戻らず、アントニア叔母も親戚が夫を見つけるまで一人で行くことができなかった。時々彼らはなんとか彼を説得し、時には時間通りに到着しましたが、その後パーティーの途中で彼がいなくなり、アントニア叔母さんはがっかりして申し訳なく思っ、すっかり意気消沈して家に帰りました。時間が経つにつれて、彼女は苦みと悲しみを蓄積し、孤立していたため誰にも発散できず、ひどい頭痛と歯痛に悩まされ、何週間も続けられました。

ある日、とても善良で敬虔な隣人がミケーレ叔父に電話して、妻を苦しめた虐待について非難しました。空気を吸ってください、彼女を家で隔離する必要はありません、すべてのクリスチャンがそうするように、彼女は外出し、ミサに行き、親戚のところに行くべきです。何よりも、彼女は散歩に行く必要があります。それが彼女の頭痛を治す唯一の方法です...

隣人は少し休憩してから、続けました：

ここから1時間もかからず、ラバの足跡を歩いています。ある程度の土地と、屋根の下にキッチンと、夏には寝室として使える少し湿った部屋のある、とても質素な小さな家があります。この

土地には、ヘーゼルナッツ、イチジク、ミカン、メドラー、ブドウ、ジッツォーレ、リンゴ、梨、オリーブ、つまり、神から与えられたあらゆる良いものがあります。

ご存知のとおり、兄が亡くなった後、叔母の世話をしなければならなくなり、田舎の世話ができなくなったので、売却しようと考えたのです。買ってみませんか？そうすれば、あなたの奥様も良い空気を吸う機会が得られるでしょう...最初はミケーレおじさんもためらっていましたが、その後訪問し、彼もそれを買うことを確言しました。すぐに契約が締結され、その財産は彼のものになりました。こうして、ヴィットリオ・エマヌエーレ3世のそっくりさんは、ますます抜け目なく危険な人物となり、アントニア叔母に次のような提案をした。服を洗濯しなければならないときは、川に下りて砂に穴を掘って飲み水や料理に必要な水を汲んで浄化します。 - 私たちは弓退して田舎に住むこともできます。私は大工として働きます。サン・バジーリオ、バランカツア、バディアヴェッキア、ピアノ・ヴィーニャの近くの村に住む家族たち。冬は川が増水して不快ですが、この障害を乗り越えます。一方、あなたは田舎を楽しむことができます。アントニアおばさんは視線を下げて、もう一度、命令されたとおりにしました： - Cuomu tu voi, eu fazzu. - あなたの望むように、私はそうします、可哀想な少女は素直に答えました。

第二章- この世の外へ



1936

年の春の初めに、貧しい少女と叔父のミシェリは、川底近くの田舎のカストラングアに引っ越しました。バディアベッキア、サン・バジリオ、ヴァランカツアのさまざまな村落では、彼がまだ働けるという噂が広がり、人々は彼に仕事を求めて電話をかけた。今では奇妙に思えるかもしれませんが、当時は、テーブル、窓、ドア、洋服ダンスが必要になったとき、大工を呼んで自宅に迎え入れるという習慣がありました。彼らは必要な木材を入手できるようにしました。ミケーレおじさんは工具を持ってきて、作業が完了するまで現場に留まりました。

彼らは彼に木を伐採するよう呼び掛け、それを数年間乾燥させたままにしました。その後、木の幹を壁に取り付けました。大工は上から鋸を持ち、下から助手が「Serra serra mastro lascio che dumè fagimmo a cascia」(鋸鋸が偉大なる巨匠、明日筆箆を作りましょう)と言いました。

木の幹は壁に取り付けられていました。彼らは巨大な鋸を使って板を手に入れ、それらを使って窓、ベッド、ワードローブを作りました。この仕事をするために、彼は4時に起きて、雑嚢と針を持って出発しました。彼が家に着くと、客たちは皮に玉ねぎ入りの新鮮な牛乳と一切れのパンを差し出した。正午にはパスタとチーズを一皿。夕暮れ時に彼は仕事をやめ、日曜日にノバラで請求書を支払う前に、最初の手付金として自家製パンを与えました。

数年が経ち、息子のトゥリルは成長し、残りの人生を田舎で孤立して過ごすつもりは絶対にないことを身をもって理解した。彼は父親の仕事を学んでいましたが、専門的に家具職人になりたいと考えていました。彼はなんとか父親を説得して、その芸術を学べる可能性のある都市に行かせることに成功した。彼はカタニアに移り、2年間の見習いを経て非常に優秀になり、その仕事をする準備ができたと感じました。そして19歳になったので、自分の家族を築く時期が来たと考えました。彼は羊飼いの娘と何年も知り合いで、結婚することを決めたが、息子に同じカーストの女性と結婚することを望んでいた叔父のミシェリの希望に反していた。当時、信じられないことですが、それは次のようなものでした。職人にとって、羊飼いの娘と結婚することは大きな不名誉でした。突然、父と息子の間に大きな対立が勃発し、トゥリルは父と継母から決定的に決別することになった。新しい家族とともに彼は国を離れ、コモに移り、そこで仕事で富を築きました。

叔父たちには子供がいなかったため、トゥリルが去ったことで、彼らは決定的に孤立することになった。この孤立感で最も苦しんだのはアントニアおばさんで、彼女は一日中、周囲を飛び交う鳥、ハエ、蚊と会話して過ごしました。田舎の洞窟では誰とも話す機会がなかった。クリスマス、イースター、あるいは8月中旬の聖母アスンタの祝日などの重要な祝日のときだけ、彼は母を訪ねるために町へ行くことができました。これらの訪問の1つで、彼女は自分の状態について長い間不平を言った後、妹に次のように提案しました。もっと自由に小さな子どものために自分自身を捧げることができます。空気の良い田舎に連れて行き、彼女のために尽くします。母は最初は迷っていましたが、いつものように、彼女の慣れやすい性格を考慮して、妹の強い主張の後、同意しました。

私にとって試練が始まりました。おそらく暑い日でした。1938 年の夏が始まり、私は 2 歳で、叔母が私を迎えに来ました。私は布製の袋にブラウスとパンツ2枚を入れ、何も知らずに家を出ました。私はまだ小さかったので、その日から私のヴィア・クルシスが始まるとは想像できませんでした。私たちはラバの足跡をたどって、30分かそれ以上経って、あたかも不幸を予言するかのようにカストラングア（カサンドラ！）というあまり安心できない名前のこの人里離れた場所に到着した。要するに、その名前はすでに完全な計画だったのだ。当時はそれに気づくこ

とができませんでした。夫は最初は私をよく迎えてくれましたが、叔母は私の好みをつかむために時折私にお菓子を買ってきてくれました。母に会いにノバラに私と一緒にいったとき、母はいつも私に「家には帰らないほうがいいけど、帰ったほうがいいよ」としつこく言いました。孤独だった彼女と一緒に成長し、彼女が私の母親になると信じていました。私は従うことしかできませんでした。

一方、父はサルデーニャから戻り、母を妊娠させるのに十分な1週間だけ滞在して、再び出発しました。それは
1939
年で、その翌年にアントニエッタが生まれました。叔母のアントニアが母に会いに私をノバラに連れて行ってくれたとき、初めて妹に会ったことを今でもぼんやりと覚えています。私は小さなアントニエッタを抱きしめるために家にいたかったのですが、兵士のように厳格になって私の人生をコントロールするようになった叔母が私にこう言いました。
、美しい人形を作ってあげる)。

私たちが小屋に到着すると、彼は赤く恐ろしい目を描いた「カウシッタ」のぬいぐるみを私の腕の中に置きました。私は怖くなりました。ノバラの祖父と母の元に帰りたくて、私はいつも泣いていた時期でしたが、叔父のアントニアを説得する方法はありませんでした。彼女の心は石化して、私のあらゆる訴えに耳を貸さなかったのです。最初の3年間、私たちはカストランジャの田舎の家で多くの時間を過ごしましたが、そこには人影はなく、点在する家々に行楽客の姿が見られることはほとんどありませんでした。

日曜日には私たちは林村に行き、母、妹たち、そして母方の祖父を訪ねました。おじいさんは口ひげを生やした素敵なお人でした。彼は臭ぎタバコ入れを持ち歩き、時々匂いを嗅いでいた。冬になると、彼は私をマントの下に連れて広場に連れて行き、お菓子を買ったり、病院の上の居酒屋「スキャンカディッタ」でワインを試飲したりしました。夕方、カストランジャに戻りました。

ある晩、叔父はバンドのリハーサルに行き、そこでトロンボーンを演奏し、それから居酒屋に立

ち寄って酒を飲み、元気に田舎に戻っていきました。カストランジャから500メートルのところで、彼は「コンチェッティーナ、『ントイア...』」と呼び始めた。一方、家では叔母が三脚にお湯を沸かすための土鍋を用意していた。料理の途中で、おそらくワインを処分するために、彼は

。玉ねぎは加熱が不十分で、吐きそうになりました。

「食べなさい、さもないとストラップを持って死体を差し上げます...」。

当時、サン・バジリオの助産師はベネチア出身の女性でした。冬に川が氾濫したとき、ミケーレおじさんは彼女を肩に担いで（シアンカレア）、ノバラの薬局で買い物をしました。彼は家に立ち寄って、「アントニア、寒いから彼女にショールをあけて」と言った。可哀想な叔母さん、自分がミケーレの恋人だということを理解していたかどうかは分かりません。

5歳になった私は田舎で孤立し、誰とも話さず、まるで野生動物のようになってしまいました。私は皆に恥ずかしさを感じました。ノバラに行ったとき、人が怖かったので隠れました。近所の人たちはこの変化に気づき、叔父たちに私を幼稚園に行かせるよう勧めました。幸いなことに叔父たちは納得してくれました。そこである朝、叔母が叔父のミケーレにビスケットを買ってきて、父方の祖母がくれた白いわらのかごに入れてもらうように送りました。彼はビスケットと一緒に新鮮な卵を置きました。彼は私を村の修道院の近くにある保育園まで連れて行ってくれました。修道女がドアを開けて私を迎えてくれたとき、私は叫び始めました。恐怖のあまりかごを床に投げると、卵は砕け、床一面に土が残りました。叔母は私を痛めつけて罰し、私を家に連れて帰りました。それで、私の幼稚園の初日も最後の日になりました。

私が4歳の頃から、叔父がこう言うようになりました。

コンチェッティーナ、ノヴァーラに行って、頭痛のためのカルミエーリ（精神安定剤）を買ってきてください。私はラバ道に沿ってフェレットのように走り、グレコ地区を抜け、時々噴水に立ち寄って喉を潤し、薬局「ドゥ・スレシットゥ」に到着した。薬剤師の彼は驚き、私が短期間で稲妻のようにノバラに行ったり来たりすることになると友人に話しました。

5歳のとき、私は遠い親戚に連れられてノルセロナに行きました。そこで私は初めて見聞きし、とても驚きました..ラジオです！私たちはまた、豆色の布を買いに店に行きました。店員は次のように提案しました

帽子と白いスカーフも買ってください。最終的に彼らは納得し、店員は光沢のある青と水色のサテンの切れ端を

2枚無料でくれました。翌日、私たちは生地を母に渡し、母は数日で服を作ってくれました。日曜日になると、私はノヴァーラの侯爵や男爵の娘になったような気分になりました。

戦争のさなかの

1941

年の冬、サルデーニャ島での仕事を終えた父は、友人とともに北部の都市で富を求め、靴屋として昔の仕事を再開して生きていこうと決心しました。母が父と一緒にいたいという雰囲気は漂っていて、私はこれに動揺したので、ある日、母のベッドの下に潜り込み、服を脱いで、米粒2粒、かさぶたができた将来の乳首を観察しました。私を洗ったことはありません。彼らは暴力的に私からそれらを奪い去りました。怪我をしたので血が出たのを覚えています。昼も夜も必要だったキャンバスシャツを着て、それからドレスを着ましたが、誰も気づきませんでした。

出発する前に、母親はかわいそうな男が一人で残されたので、順番に祖父の家を出ようと思いました。彼は当時領主の特権であった電灯の設置を考えた。以前は「lulusu」は油と一緒に使われていました。ミケーレおじさんはこれに動揺しました。数日後、順番に電気技師に電話して、家にも照明を取り付けてもらいました。それで私も村に行ったとき、急な木の階段で少し明かりを楽しみました。私がトイレ（ラトレア）に行かなければならないとき、それは基本的に彼の研究室の裏の1階にある簡単な穴でしたが、その隣にはいつも棺が積み上げられており、叔父が求めに備えて建てたものでした。

1942

年

3

月

1

日の朝、私は水色の袖に青いサテンを着て、叔父と祖父のトーレと一緒に、母と妹たちと一緒にサンセバスティアーノ広場にある郵便局、つまり、サンセバスティアーノ広場に行きました。ヴィリアトーレ駅まで行くバスに乗りました。

4歳の妹ローザちゃんは登りたくなかったので、叔父は彼女を説得するためにこう言いました。
- 上がらないと病気になるよ - (おならを2回するよ)。

長男の私は叔母の影響を受けて、そこを離れずノバラに残りました。涙が止まらなかった。私は祖父の腕の中に慰めを求めました。彼も一人になってしまったので、その日は私が付き添ってあげるために一緒に居ました。約20日後、母親から旅行の成功を告げる最初の手紙が届いた。お父さんは、家に水とガスストーブのある居心地の良いアパートを彼女に見つけました。これは彼女にとって新しいものでした。話を続けると、到着した翌日、彼女は美容師を家に呼んで、おしゃれなヘアカットをしてもらいました。村ではほとんどすべての女性が長い髪をチューペで結っていました。つまり、母は生まれて初めて幸せで満足したのです。物語の終わりに、彼は私を叔母に勧めました。彼は確かにカストランジャでの私の苦しみを想像していませんでした。

私たちが出発した翌日、アントニアおばさんは私を田舎に連れて行き、10月に1年生ではなく2年生に出席できるように、書き方を教えるために1年生の本を買ってくれるように夫に言いました。かわいそうな私

もうプレイすることはできませんでしたが、オークションや数字を書くのに時間を費やさなければなりません。先生は、教えていたサン・バジリオからの帰り道、時々カストランジャを通りました。彼女の名前はマリア、叔母の知っている船長の娘でした。彼は彼女にコップ一杯の水を勧めた。その間、私は彼女にノートを見せると、彼女は私を愛撫してくれました。彼女はカバンから赤鉛筆を取り出して「よくやった」と書きました。自分が褒められるのを見るのは、何という喜び、何という幸せでしょうか。それは私にとって並外れたものです。私は日に日に憂鬱になっていき、父方の叔父や祖父母のところに連れて行ってほしいと懇願しましたが、叔母はその必要はないと言いました。

彼は、私がどのように扱われ、食事を与えられたかを彼らに話すのではないかと心配していました。実際、成長し発達しなければならない少女にとって、食べ物では足りませんでした。朝、彼らは私にチーズの入った堅いパンを一切れ与え、正午にはトマトとオリーブ2個のサラダ

を与えました。夕方、夫がそこにいたとき、アントニアおばさんは生の玉ねぎをベースにした即席ソースでパスタを作りました。そして、もし食べなかったら、たくさん殴られる危険がありました。変化に富むために、彼らはパスタと豆、または一種の柔らかいポレンタを調理した夜もありました。クリスマス、新年、カーニバル、イースターのときだけ、彼らは鶏やウサギを殺しました。

1月に彼らは豚を殺し、そこからスパイシーなサラミとラードを入手したが、それらは一滴ずつ消費しなければならず、そうでなければ一年を通して十分ではなかった。叔父は時々日曜日に、今でも思い出すだけでうんざりするような汚れた胃袋や、パセリの枝に腸を丸めて揚げたホタテ貝などを買ってくれました。彼らによれば、私たちは祖母のように浪費すべきではないので、それらはすべて安物の食べ物であり、彼らは私に繰り返しました：

ほら、彼らはいつも鍋にソーセージとストックフィッシュがいっぱいあり、食べたり飲んだりします。私たちはそれらの人々から離れなければなりません - 彼らは言いました - 叔父たちは、他の親戚が私に大陸の母と父に加わるよう強く説得するのではないかと心配していました。彼らは私を嫌わせようと必死だったので、私は時々彼らに会ったとき、彼らを見ないように目を手で覆いました。

9月になり、2級の入学試験を受けなければならませんでした。叔父たちは私を村に連れて行き、管理人、二年生の時の先生、そして試験委員会の先生に私を見守ってくれるように相談しました。彼らは皆、私の昇進を確実にするための贈り物として卵を持ってきました。私はそれらの人々と接触したことはありませんでしたが、教室にはインクつぼのある二人掛けの木の机がいくつかありました。私と一緒に留式を受けている女の子もいました。彼らは私に黒板の足し算と引き算の問題を解かせました。インク壺も黒板も、私にとってはまったく新しいものでした。私は恐怖と恥ずかしさで木の葉のように震えていました。アントニアおばさんは私に 1 から 10 までの数字の書き方しか教えてくれなかったもので、演算の解き方が分かりませんでした。次に、ちょっとした考えをノートに文章として書くように言われましたが、どこから始めればよいのかわかりませんでした。混乱が終わると、管理人は私を家に連れて帰りました。叔母がテストの結果はどうだったか尋ねると、用務員は「あまりうまくいかなかったが、最終的な判断は先生たちに委ねられる」と答えた。

驚いたことに、結果は良好で、2

番目のクラスに入学することができました。学校に行く準備はできていましたが、エプロンの問題が発生しました。ミケーレおじさんは前日その店に行って、残りの黒い布地を買っていました。アントニアおばさんは一日以内に私の制服を作ってくれました。フォルダーを購入するにはさらにお金が必要でした。叔父たちはお金を持っていましたが、節約することに夢中だったので、守銭奴の叔父が頑張って私に窓クリップが付いた合板フォルダーを作ってくれました。彼らは私にペンすら買ってくれませんでした。私の叔父は、先端にペン先が付いた薄い木片でそれを作りました。彼らは

2冊のノートと鉛筆を交換することができず、それらを買わなければなりませんでした。1942年10月1

日、叔母が私を学校まで付き添ってくれました。まず彼女は教区に行き、私が授業に出ていないために学校が要求する出生証明書を求めました。先生は優しさに満ちていて、温かく迎えてくれましたが、幼い頃に父親の Pasta 工場で起きた事故で右腕の代わりにゴム製の義手を入れたせいか、私は先生が怖かったです。最前列の席を指定してもらいました。前年には私に会わなかった新しい仲間たちは、私の存在に興味をそそられて、仲間内でつぶやいた：

なぜこれがシッカリを引き起こすのですか？

(この痩せた女の子は誰ですか?) 私はとても怖くて恥ずかしくて口を開けることができず、先生が愛情を込めて私に尋ねた質問にも答えることができませんでした。

私は野生児だったので、外におしっこをしに行く勇気がなく、自分からおしっこをしたこともありませんでした。それで、家に帰ると、どうせ翌日までに乾かない私のドレスを洗濯しなければならなかったのです。叔母が私を殴りました。日経ち、毎回同じことが繰り返されました。昼間にそれを知った先生が私をトイレに行かせてくれましたが、時々忘れていて自分で取り返しました。クラスメートたちは私をまるで疫病にでも罹っているかのように無視して避け、友達になろうともしませんでした。

彼らは村で出

会ったのでお互いのことを知っていましたが、私は田舎の家まで1時間近く歩かなければならなかったのです。友達になる機会がありませんでした。叔父たちは日曜日にのみ町に来て、友人に会

い、ワインを飲みながら数時間幸せな時間を過ごしました。しかし、ほとんどの時間 叔母は夫の仕事の命令を受けるために家にいた。

6歳のとき、私は長い上り坂のラバ道を歩きました。途中で立ち止まって、葉っぱに囲まれたスミレの束を摘んで先生に差し上げました。

伴って田舎に戻ったが、生きている魂には一度も会わなかった。

私はそのあばら家に閉じ込められ、穏やかとは言えない雰囲気の中で、叔母が私に対してますます厳しくなるという自分自身を空想しました。叔父は仕事が終わると必ずといっていいほど居酒屋に立ち寄り、いつも酔っ払って深夜に帰宅する。時々、いつもよりほろ酔いで道に迷って家に帰れなくなることもあった。叔母と近所の人たちが、真夜中に提灯の明かりを頼りに川沿いを探しに行った。彼が地面に倒れているのを見つけたとき、彼らは彼に家に帰るよう説得した。

その間、私は学校で何も良いことができませんでした。第 1
四半期の終わりに、教師は通知表を配りました。次にファシストの記章が付けられ、残念ながらすべての科目が不十分でした。私の通知表はクラスで最も悪いものでした。叔母を励ますために、他の通知表も私のようなものであると言いましたが、叔母は危うく餌に乗ろうとしました。それで私は毎日自分で勇気を出して、クラスで何人かのクラスメートと友達になろうと努力しました。私は彼らに近づきたかったのですが、おそらく彼らの目には私が貧しい田舎娘だったためか、彼らは私を会話から排除しました。

第3章- 砂上のゲーム



カストランジャで孤独に過ごした数年間は、一日中鳥のさえずり、夏には海からシロッコが忍び寄る耳をつんざくようなセミの鳴き声を聞くことしかできず、時間が過ぎることはありませんでした。川のジグザグの道に沿って谷に火を放ちます。田舎の動物たちは私の友達でした。そこで私は空想をしながら時間を過ごしました。空や木の枝を背景に現れる人物たちから始めて、私は自分の世界を構築しました。言葉を話す野生動物 ヘッドセーバー

ロックの端に並んだ騎士、そして私の手で私は魔法の力で彼らを墮落させ、彼らが恐怖によって破壊されるのを見た。それから私は岩をドラゴンに変えました。ドラゴンは突然山から飛び立ち、高く飛び、田舎中に恐怖を広げました。雲を飛行艇に変えて、母や妹たちが待っている遠い海の向こうへ行きたいと思い空を旅しました。川の水から出てきたカニは体が大きくなり、川を進んでいくと植物を根こそぎにまでしてしまうほどの巨大な動物に変化した。

時々、叔母のアントニアの不愉快な顔を思い出しました。彼女は私を愛していませんでした、彼女は私を愛していませんでした、そして私は彼女を憎んでいました。母は私を妹に預けていましたが、いつか迎えに来るとも約束していました。これが私がよく木に登った理由です。彼女が白馬に乗って父と一緒に到着するのを期待しながら地平線を眺めた。サン・バジリオとヴァランカッツァの近くの村では男たちは全員立ち去った。残ったのは女

性と子供と数人の老人だけだった。そこは、ほとんど生命が触れられていない静かな村でした。時は止まり、人々はすべてが変わり、いつか戦争が終われば、散り散りになって死んで揺れる家々の群れに文明が凱旋するだろうと信じていた。私は友達欲しかったし、自分が一人で見捨てられたわけではないことを知り、守られて、あの人やあの人のお家に避難できると知ってほしかったと思います。私には家族がいないこと、両親は海の向こう岸、果てしなく続く青の彼方にいて、私と両親の間には高くて越えられない山のようなものがある、と言う権利さえありませんでした。その代わりに、私を虐待した叔母と同居することになりました。そう思って彼女が現れると、その甲高く凶悪な声で私をイライラさせた。叫び、叫び、侮辱し、虐待するために作られた声。

動物たちも彼の声に怖がりました。夫の時だけ、彼女は冠を下げ、声の大きさが一変し、羊の鳴き声に変わった。叔母は、小さな女の子には自分の周りで何が起こっているのか理解できないと考えていました。私はすべてを理解しただけでなく、沈黙したり受け身になったりしませんでした。それは絶え間ない戦いだった。終わりのない、疲れ果てた闘い。時々、私は将来のことを考えました。彼女は年老いて無力で、私は若くて強かったのですが、すべてにもかかわらず、私は彼女をひどい扱いをしなかったでしょう、それは私の性質の一部ではありませんでした。

時々川の近くに行くと、そこで人々が洗濯をしに行ったり、洗濯をしたりしていました。つまり、シーツや毛布を洗い、最初にすべてを灰の中に浸しました。あるいは、毛刈りが終わった後、彼らが羊の毛を洗い、天日で乾燥させて白くし、それをベッドのマットレスに詰めるのに使用したとき。私は海岸の石の間に残っている破片を集めに行き、それを縫いぐるみ人形に着せました。どうしたらいいのかわからないとき、私はザリガニを探すために川の岸辺の石を持ち上げ始めました。ザリガニの爪が指を挟まないように、頭の上で指で巧みに引っ掛けました。それらを家に持ち帰り、夕方叔母が火をつけてくれたので、焼いて食べました。私にとってそれは特別な夕食でした。時々、カニの代わりに、石が持ち上げられるとすぐに、小さな恐怖のカエルが垂直ジャンプで上に向かって飛び上がり、私は恐怖で飛び上がりました。私は彼らを遊び仲間だと思っていましたし、時には彼らを一晩中暗闇の中に一人にして立ち去らなければならなかったのを後悔したことさえありました。夕方、家に戻らなければならなかったとき、私は谷間に生じる反響

を利用して、ミケーレおじさんに大声で呼びかけました。時々、夏になると、谷のさらに上にある家にスカルディーノ一家が住んでいたのもので、私は彼らを訪ねに行きました。私は兄弟の末っ子であるミンマと遊びました。

グーフィーは人形のために椅子やテーブルを作っていました。数時間を一緒に過ごせて本当に良かったです。朝、牛乳を買いに川の対岸に行ったときに私に電話がありました。彼らはバケツに水を入れる必要があり、「コンセッティナ」は彼がそれから搾り取るのを見て満足していました。牛の飼い主、ミッカ・ア・カッペレアさんが私を隣で、グラス半分を差し出してくれました。叔母の家では、年に

2

一回牛乳が出てきました。ビスケットを作ったとき、イースターに色付きのリング卵を使ったハトを用意したときです。牛乳が沸騰したら、最後の部分まですくい取りました。田舎の家の部屋には叔父のベッドがあり、ベッドと呼べるかどうかは不明だが、ノバラに馬毛のベッドを置いてきたので、藁のマットレスを敷いた二本の鉄の架台の上に板が置かれていた。私は藁のマットレスの上に、油っぽくて擦り切れた古い軍用毛布だけを敷いて寝なければなりませんでした。日中も着ていたズックシャツをノーパンで着て就寝しました。毎晩苦しんだ寒さは言葉では言い表せません。雨が降ったときは、屋根から浸透した水を集めるためにコンテナを設置する必要がありました。夜におしっこをしたくなったら、家を出て段差の近くでおしっこをしなければなりませんでした。もし私かなぜ夢を見ているのかわからず、わらの布団の上で夢を見ていたとしたら、朝にはたくさん殴られることになるでしょう。アントニアおばさんも日中に使っていたのと同じシャツを着て眠りましたが、ミケーレおじさんは母親と同じように丸まってしまいました。

就寝の儀式は通常の儀式に従って行われました。最初に私が寝て、次に叔母の番になり、次に叔父がズボンと縞模様のキャンバスの下着を脱ぎました。日中着ていたかなり緩めのシャツを着たまま、彼はベッドに向かい、壁際のテーブルに置かれた石油ランプを消しました。いたずら好きな私が見て見ぬふりをして覗いてみると、彼が火を消そうとかがんだとき、壁に彼のシルエットが中国の影のように映り、ディンドンがぶら下がっているのが見えました。

—

ああ、なんて素敵なんでしょう！

——飲んだワインのせいで体が熱くなったからだ、と彼は言った。彼らのベッドの隣には、乾

燥イチジクを入れるためのキャップが 2 つ、つまり大きなサトウキビのかごが 2 つありました。彼らは汚れて油まみれの布で彼らを覆い、後者の上には叔父の清潔な下着が置かれていました。ベッドの近くの箱の中に、冬に学校に行くときに頭に巻いたパンとスカーフ、私の下着、叔母の下着が保管されていました。日曜日にノバラのミサに行くときにのみ使用しました。叔父たちは、無駄に着古してしまうから田舎では着ないほうがいいと言いました。

1月に彼らは豚を殺した。彼らはソーセージをいくつか用意し、ラードに塩を加えた。茹でた足はラードに浸したテラコッタの鍋に入れて保存されました。伝統的にそれまで食べることができなかったため、通常は5月に新鮮なそら豆と一緒に食べられました。ある時、4月だったので、とてもお腹が空いていたのですが、パンと一緒に何を食べたらいいいのか分からなかったので、叔母にそのことを尋ねました。叔母は私が気が狂ったと叫び始めました。ある日、学校から帰る途中、ラバ道沿いでオフエリアと彼女の妹に出会いました。彼らは母親を亡くし、父親とともにフランスから戻ってきました。

彼らは私よりもずっと青白い顔をしていたので、私は彼らを憐れんで、こう言いました。「私の住んでいる場所においでよ。今、叔母が氷を汲みに行っているから、オーブンの中に食べ物の入った鍋があるの。それを取って、自分たちで食べなさい。でもやめなさい」それからは誰にも何も言わないでください。彼らは私に感謝し、空腹に駆られてためらうことなく私のアドバイスに従いました。

5月、叔父たちはそら豆を煮た後、豚足を取りに行きましたが、代わりにラードの入った鍋しか見つかりませんでした。当然、それが私だと思い、お金を払えと何日もの間私に対して激怒しました。その時、私は初めて彼らの欲望との戦いに勝利したという快感を覚えて、とても誇りに思いました。衛生状態が悪いため、ノミが家中に平然と蔓延っていました。夜になると首に刺され、叔母はノミが血を吸うのを防ぐために毎晩オリーブオイルを塗ってくれました。朝、私の首はペイントされたように見えました。叔母と同じように、私も頭を洗うことに慣れていなかったため、シラミに悩まされました。一方、叔母は私の髪をカールさせ、水と砂糖を塗ってスタイルを整えていました。

一方、私のクラスメートはいつも清潔でした。彼らの中で最も貧しい人でさえ私ほど汚れていませんでした。教師はまた、私をみんなから遠ざけて最後の机に追いやることで、疎外化に貢献しました。私の体はなんとも言えないほど汚れていました。年に一度、町で最も重要なフェッラゴスト祭りの際に、彼らは私を川で洗ってくれました。

7歳のころ、母のことを考えているときに、火鉢の沸騰する灰の中に落ちてしまいました。私は右手に火傷をしましたが、叔母は私を医者連れて行かず、毎日ハーブで治療してくれました。鳩の卵とつと同じような泡が2つできて、私は痛みで叫びましたが、彼女は決して動きませんでした。ネズミにかじられているように見えました。

数か月後に奇跡的に回復しましたが、まだその兆候が残っています。ある日曜日、学校に通っていたとき、私がシルコニーにいたとき、降りてきた小さな女の子が、ヴィンチェンツィナ先生の教理問答のレッスンと一緒に行かないかと尋ねました。叔母は大事な休日にしか私をミサに連れて行ってくれなかったもので、教会に行く意味が分かりませんでした。ブエミ神父という司祭が家の向かいに住んでいたのですが、私は彼に会ったことはほとんどなく、しぶしぶ眺めていました。叔母は私に吐き気がするほど繰り返しました。「彼に話しかけたら、あの司祭があなたの舌を切り取るでしょう。」しかし、私がお願いしたところ、思いがけずカテキズムの授業を受ける許可を得ました。私はその環境にすぐに安心しました。若い女性は私に小冊子と新聞をくれました。ある日、イエスは私に初聖体拝領の準備をしてくれと言いました。家でその話をしたら、まだ若すぎると言われました。私は嘘について、グループの女の子全員がそうするだろうと答えました。実際には、それらはすでに確認されていましたが、若い女性と私は合意を維持し、サン・ニコラの司祭と日付、つまりコーパス・クリスティの日を設定しました。

白いドレスの問題が生じましたが、誰かが修道女たちがそれをレンタルしていると叔母に知らせました。待ちに待った日がやって来ました。朝、彼は私を教会の断食に連れて行ってくれました。彼女は、自分から教理問答の女性に連絡を取ったことがなかったので、他の女の子たちがそこにいると思っていました。私が一人であることに気づいた彼女は、「嘘つき、失礼だ」と私を侮辱しました。私の先生もその朝、他の人たちと一緒にミサに出席していました。その場にいた何

人かの女性が彼女を落ち着かせた。司祭が到着し、私の手を取って告解のために聖具室に連れて行きました。彼は私がこれまで聞いたことのない美しい言葉を教えてくれました。私は天国に飛んでいくような気がして、こう言いました。「司祭たちが舌を切り取るというのは真実ではありません。むしろ、彼らは小さな女の子の苦しみを理解する方法を知っています。」できることなら、喜んで彼を抱き締めてキスしただろう。

彼は私に悔い改めとして「万歳のマリア」を5回言わせ、私は席に戻りました。叔母はすぐに私がそこに長く滞在していた司祭に何を言ったのかと尋ねたので、私はこう言いました： - 告白は秘密であると若い女性が教えてくれました -。 - はい、でも最初に教えてください - ハーピーは主張しました。とんでもない。ミサと聖体拝領があり、帰り際に彼らは私に叔父の手にキスをして「祝福してください」と言うように強制しました。私はいつも同じフレーズで祖父から始まり、それから親戚全員を回りました。ガエタナおばさんが私に小冊子をくれました。私はお腹が空いていましたが、誰も食べ物を提供しませんでした。通常、式典が終わったら、ビスケット入りのグラニータを買いにバーに行くのが通例でしたが、節約マニアが押し寄せてきました。正午にはおパスタを食べ、午後には写真家のところに行きました。親戚は母親の写真を送るよう提案した。



私は

番目のクラスを終了しましたが、非常に低い点数で合格しました。その年、私たちは夏の間ずっと田舎にいななければなりませんでした。私は反対しました：

少なくとも日曜日にはミサに行き、一人でいる祖父を訪ねなければなりません。彼は喘息を患っていたが、とても良い人だった。娘が夫を無視したのは、部分的には過失からであり、部分的には、隣人、親戚、義父に対して常に怒っていた夫に条件付けされたこともあった。

私は洗濯物を持って行き、ミケリー口の内緒で叔母に渡しました。そうしないと大変なことになるからです。彼は父親に対して愛情すら感じていませんでした。ある日、異母姉妹の一人がカストランジャにやって来て、父親が亡くなったことを告げました。

「帰らなければ、お尻を蹴ってやる」と彼は彼女に言いました。

村でパーティーが開かれたとき、音楽バンドのメンバーに「ペッツォドゥーロ」というアイスクリームが提供されました。これは、その独特の粘稠さからそう呼ばれたアイスクリームです。ミケーレおじさん、それが気に入らなかったのか、それともいつもと違う寛大な態度に駆られたのかは定かではありませんが、私が通り過ぎるのを見て、彼は私に電話をかけました、「コンチェッティーナ、アイスクリームを取りに来て」。そこで私は、めったにない機会に、良いものを楽しむ機会を利用しました。

少し前に、バチェノのコセンティーノ博士が、私の記憶の中に忘れていた詳細を思い出させてくれました。バンドが町の通りで演奏している間、子供たちはパレードに参加しようとしていました。しかし、彼らの存在を正当化するには、メンバーを「知る」必要がありました。それを証明するために、彼はジャケットのポケットに手を入れていました。こうして私は叔父のミケーレを追ったが、小学校教師の息子で父親のいないジャンニ・コセンティーノはギャングのリーダーのポケットに手を入れていた。

戦争の最中、ノバラにいくつかの爆弾が落ち始めた。全員が逃げ出し、何人かの知人は私たちと一緒にカストラングアに避難しました。私にとって、それは仲間と一緒にになれるためのパーティーでした。時折、破片の音が聞こえてきました。オランダのペストリーショップのオーナーの息子が爆弾で引き裂かれたという悲劇的なニュースも届いた。ドモドッソラの母親は4人目を妊娠しており、ローザとアントニエッタと二人きりで残された。私の父はベルサグリエーレになるためにシチリアに呼び戻されました。退職から数カ月後、母親がエマという女の子を出産したこと、そして4人の子供がいと免除される予定なので帰国する可能性があることを知った。

残念ながら、ドモドッソラに到着したとき、彼は苦い驚きに気づきました。エマは 12 日後に息を引き取っていたのです。

2日後、彼は塹壕に戻らなければならなかった。数か月後、それは9月8日の後の不確実性と不安定な時期であったが、彼はなんとか兵役を逃れ、戦争が終わるのを待って母親と合流するためにノバラに戻った。彼は小さな靴屋を開きました。毎日私は彼に会いに行きました。内気な4年の割に抜け目がない私は、父が軍人の夫を持つ既婚女性と寝るつもりだと直感した。ある日、私はベルトラミ広場の上り坂の通りにあるチケット売り場に入りました。隣のお店の人がお父さんとおしゃべりしていました。私は人差し指と中指を立てて飛びかかり、母を浮気していた父の目をくりぬきました。近所の人がなんとか私を引き留めてくれましたが、父は笑顔で「自分のことは自分でやれよ」と言いました。

44年に、彼と同じような巻き毛の、黒髪の男の子が生まれました..

バディアベッキアでは、彼の父方の祖父が胃癌で倒れた。私は叔母から彼に会いに行く許可を得ました。私はよくカストラングアから下りてきて、川沿いを歩きました。私は彼がベッドで安らかに過ごしていたことを覚えています。祖母はまだ店のことで忙しく、ほとんど時間を割くことができませんでした。彼女はハエを追い払おうと彼の手にオリーブの枝を置きましたが、彼の状態は悪化し、もう力がなくなったので、私はハエを追い払いました。1944年11月2日、彼は 66

歳で天国に旅立ちました。お父さんはまだシチリアにいました。葬儀には叔父たちも参列した。

時々、母から手紙が届きました。
45年に父はドモドッソラに戻り、46年に弟のジュゼッペが生まれました。

第4章- 石曲 クモの巣、そして邪悪な目



世界中で戦争が激化し、通信は困難になり、母からの連絡もなくなりました。幸いなことに、私の父はベルサリエリ隊の一員としてシチリア島に呼び戻されており、数日間自由になったときに私を訪ねてきました。戦争のせいで田舎には人がたくさんいました。避難民たちは通常 15 日間滞在しましたが、当時町は爆撃の危険にさらされており、一年中田舎に滞在することを好みました。

私は時々その人たちのところに避難しました。食べ物がないにもかかわらず、いつも元気な4人の子供を持つ家族がいました。干しイチジクをたくさん持っていながら誰にも渡さなかった叔父たちの食欲を見て、私は一握りにとってこっそり彼らに持って行きました。私は彼らが朝食用にくれた豆の一部を彼らのために取っておきました。硬いパンでさえ、学校に行く前に叔母が私のポケットに入れてくれた一切れを子供たちと分け合い、その代わりに私に書くための紙をくれ、ブランコで遊ばせ、そのうちの一人はおもちゃや椅子などを作りました。彼女は私と彼女の妹に人形用のベッドを与え、彼女の姉妹は私たちのために縫いぐるみ人形を作りました。

時々、私は周囲の地域の女性たちが灰で服を洗いに行く川に下り、そこに立って、2つの大きな石で支えられた容器の水を温めるために火が灯されるのを不思議そうに見つめていました。

。私は叔母がこれらの手術をしているのを見たことはありません。彼はほとんど洗濯をしなかったか、油まみれで非常に汚れた服が露出しないように、誰もいないときに川に行きました。

また、家で織った亜麻布を石の上に二、三日間敷く女性たちを観察したこともありました。それ

きましたが、私は聞こえないふりをしていました。戦時中、彼女の義理の娘も小さな女の子を連れてトリノから帰国していた。義理の息子サルヴァトーレへの敬意から、彼女は女王のように扱われた。その間、彼らは林に残り、叔母はこの機会に良い印象を与えるために香りのよい石鹸、リネンのタオル、食器乾燥機、テーブルクロス、ナプキンを取り出しました。その代わりに、私は使用人のように扱われ、客を送るのは恥ずべきことだったので、用事を済ませたり、泉から水を汲むために遣わされたりしました。

クリスマスが到来し、北部の習慣に従って、朝、花嫁は赤ちゃんイエスから娘に美しい贈り物を渡されました。それは人形用の美しい鉢と受け皿のセットでした。私は彼女のことをうれしく思いましたが、同時に、そんなことは私には起こらなかったのが怒りが爆発しました。私はどんどん弱っていきました。ブドウはあったが、食べるのは残念だった。ワインを作るためには搾らなければならなかった。近所の人から盗んだものしか食べられませんでした。ヘーゼルナッツは販売するために集められました。森のリスのようにこっそり食べました。叔父たちはビスケットを作るためにクリスマスとイースターにしか牛乳を買わなかったのが、私は沸騰している間に小さじでそれをすくいました。叔母はめったに私に目玉焼きを用意してくれませんでした。私は彼女が私のためにそれを揚げてくれることをよく望んでいました：

いくつか持っていて、卵を産む時間が過ぎたら、それをしましましょう（彼はメッシーナ出身の若者で、田舎を歩き回って卵を集めて、それを新鮮だと偽っていました）それらを売ってお金を手に入れることができます - 。彼は2か月間卵を集め、それを販売した。

卵を買ったメッシーナの人たちの手にはひよこがいいたのでしょう。イチジクは一口すすめる必要があり、食べることができるのはほんの数個だけで、残りは販売するか冬の間保存するために天日

10月、夕暮れにはきれいな栗ができていました。皮をむいたものが残っていると、叔父はそれを小さな部屋のテーブルの上（皿の上ではなく、ランプから滴り落ちた油で塗ったマットの上）に置き、朝起きると、

Christian.あるいは、月曜日に聞こえたり、火曜日に聞こえたり、水曜日に聞こえたり、木曜日に聞こえたり、ヴィナルディに聞こえたり、サブトゥに聞こえたり、復活祭のマティア・デュ・ジュルヌ、ヴィエルム・スタードウドゥ・ア・ティエラ・カスカ。

どうやって生き残ったのか分かりません。

何年も経ち、お腹が痛くなりました。部屋ほどの大きさの機械でレントゲンを撮りに行きました。潰瘍があるかどうかを確認するために、白いレップスをくれました。残念ながら何も見えませんでした。放射線科医は胃炎だと言い、痛みを和らげるための緩下剤をくれました。スプーン一杯

の水も我慢できないところまで来ました。私は50歳くらいでした。ピアチェンツァ出身のアルマンドの友人であるパオロが、私を専門医に連れて行ってくれと提案してくれました。彼はマゼオ博士のところにも来ました。胃カメラの器具が喉を越えて入ることができませんでした。

「この女性を救う方法がわかりません。幽門が閉じています。」と医師は言いました。胃カメラ検査を受けた人は全員自分の足で部屋から出ました。点滴を受けて担架に乗っている私。医者では私2ヶ月間の強力な治療を処方してくれました。戻ってきたときも、機器はまだ合格していませんでした。3か月間のさらに強力な治療も追加されました。

最初の来院から 5 か月後、器具が幽門を突き破り始めました。
"奇跡!" マゼオ博士は言いました。チューブが抜かれると、それが先天性のものなのか原因によるものなのかを理解するために、彼は私に多くの質問をしました。私は立ち始めました。「もしかしたら、ジジが時々私に与えてくれた虫の油のせいかもしれない。」医者は彼の髪に手を入れた。「油?」
それなのにあなたはまだ生きているのよ!」。治療を続けながら、時々胃カメラ検査を繰り返しました。

私の命を救ってくれたマゼオ医師のおかげで、数年後の今、私は封じ込め薬だけで食事を楽しむことができます。

誰かがシリコニーから彼女に電話をかけたとき、叔母は頭をクラクラさせ続けた。次に彼らは彼女に、空腹時にフェロキンを小さなグラス1杯飲むようにアドバイスしました。彼女は夫を説得してそれを購入し、朝には私にもグラスをくれました。

さらに、その家には迷信も蔓延していました。叔父はいつもワインを飲んで頭痛に悩まされていたが、叔父によると原因は誰かの邪眼だという。妻は彼を追い払わなければなりませんでした。彼女は水を入れた皿を取り、塩と油を一滴注ぎ、それから頭痛のためのプリチェントゥから始めました：

オグリウ・ビリディットウ、オグリウ・サンティッシム、この家に来て、これを追い払ってくださいモロッキウ、オグリウ・ビリディット、出て、このマンムッカを追い払ってください... (祝福された油、最も神聖な油、この家に入って、この邪悪な目を追い払ってください、祝福された油、強くなって、この悪魔を追い払ってください...).

彼らの信念によれば、この祝福された油のスポットが拡大するにつれて、邪悪な目を追い払うことができます。その直後、部屋の四隅に水が撒かれ、頭痛は治まった。

傷を治すために、クモの巣を油と混ぜ合わせ、小さな肉片を混ぜてスープを作りました。その恐ろしい混合物は間違いないと彼らは言いました。朝、彼らは私にマグネシアの入った水を一杯くれました。しばらくすると、震えが止まりませんでした。私は自分自身を解放するために寒い中に出なければなりませんでした。私が回復すると、彼らは私を手品をする女性の所に送りました。彼女は私の頭からつま先まで紐で、そして水平な腕を同じ紐で測りました。欠片が欠けていれば、その年の死は避けられました。

たとえ叔父たちが彼らなりの方法で神、聖人、聖母を信じていたとしてもです。毎年9月8日、彼らは町から約40キロ離れた黒い聖母に捧げられた聖域であるティンダリまで歩いた。すでに5歳の頃から、私はその苦行をしなければなりませんでした。

ティンダリの聖域への巡礼の際、前日に叔母がボロ布でカッピニ（スリッパ）を作りました。叔父さんは時間厳守に狩りに行き、野生のウサギを1、2匹持ち帰って料理に使った。良い印象を与えるために、叔母は茄子の肉詰めも用意してくれました。彼は鏡を見て布で顔を拭きました。当時、「私の美しさ、ザザはどこにありますか」という曲が流行っていて、私はそれを「zizi」と呼ぶのが習慣になりました。

私たちは夜11時頃にティンダリに向けて出発し、夜明けに到着しました。自分の弱さのせいで疲れ果て、疲れきっていたので、私は何度も新鮮な水を求めましたが、彼らは他の疲れている人々

のように屋台で水を買うことはしませんでした。彼らは教会の近くにある唯一の熱湯が出る噴水に列を作りました。暑さを和らげるのには役に立ちませんでした。伝統によれば、彼らはひよこ豆、そら豆、カネリーニ豆を購入し、それからミサに行き、マディヌツァの祈りを捧げ、帰りに村の仲間や私の父方の親戚に会いました。正午に私たちは周囲のオリーブの木の下で食事をしました。とても疲れていたのが残念だった。実際、その日は友達の前で良い印象を与えるためにいつも美味しそうな食べ物があった。昼食には、叔父がいつも数日前に狩りに行っていたという、オーブンで調理した野生のウサギ、茄子とピーマンの詰め物、ブドウ、自家製ビスケットが含まれていた。友人たちは家に帰るために、車か馬車という交通手段を使いました。私はそれを見て、もう歩いて帰ることを諦めました。おじさんがいけば馬に乗れるのですが、そうでないと辛かったです。

第章- フクロウ



さらに宗教の話になりますが、叔父は同胞団の会員だったので、サン・ジョルジョ教会で棕櫚の日曜日に告白し、コミュニケーションをとる義務がありました。式典は悼死時に行われ、司祭はまず礼拝堂で男性全員の懺悔をし、その後女性たちの懺悔室に向かった。

大きな黒いショールを着た叔母の番が来たとき、彼女はそのショールを火格子に近づけて、できるだけ体を覆いました。まるでカモミールを吸わなければならないかのようにでした。彼は告白し、それからこう言いました。 - 今度はあなたの番です -
彼は私に言いました。年内に告白したかったのにできなかった。叔母は私を叱りました。「主をからかうべきではありません。年に一度で十分です。そうでないと、目でも罪を犯す可能性があるのです、あなたはホストを務める資格がありません。」

9時頃ミサ聖祭、聖体拝領、そしてすぐに帰宅。いつものように、些細な理由から、叔父は悪口を言い始め、彼女は神経質な咳を始めました。言葉では言い表せないような光景が起こりました。その日、誰かが何らかの理由で必要になったとしても、唾を吐き出すことはできず、そうでなければ口から主を放り出すでしょう。不幸にもそれが起こった場合、彼は水差しの蓋を取り、その中に唾を吐き、水と砂糖を加えた液本を再び飲みました。聖週間中、人々は夜も街に留まり、修道士による夜の説教に参加しました。木曜日には、水で茹でたゆで卵と有毒な着色料であるアネラを混ぜたさまざまな形のビスケット生地であるコロンベが準備された。聖金曜日の断食の朝

、私たちは小麦の芽で飾られたすべての教会を訪れ、その後、一年の健康を保証する孫娘（強烈な香りの薬草）の葉を3枚飲み込みました。

十字架につけられたイエスを傷つけないように、縫うと針が刺さるから、自分の体を傷つける危険があるとわかったら、日中働く必要はなかったのです。その日は何をしても殴られませんでした。さもないければイエス様が泣くでしょう。土曜日の午前11時に、平和と復活のミサがありました。子供たちは皆、司祭の祝福を受けてそれを食べるために鳩を持ってきました。イースター後の火曜日に予定されていた修学旅行のために、卵

2

個を持った鳩を救わなければならなかったので、私はその満足感を決して取り除くことができませんでした。私は先生に卵を差し出さなければなりませんでした。イースターの日、あまりお金をかけないように、彼らは私にロイヤルレパスタで作った小さな子羊を買ってくれました。叔父はとてもケチだったので、火でできた鍋から出るすすで靴を磨いていました。叔母が、彼が仕事を終えて、その代金を支払っていることを知ったら、「叔父がお金を持ってきたかどうか聞いてください」とアドバイスしてくれました。

彼が感動して彼女に10リラ、私に5リラを与えるまで、彼女と私はほとんど二人の小さな奴隷のように彼を崇拜しなければなりませんでした。私のお金は貯金箱に行く予定だったので使えませんでした。一度、叔母に宝くじをしたいと言いました。彼女は勝ちたいと思っていたので同意した。私のは嘘でした。実際、私はクラスメートたちと比べて服装が下手だと感じていました。クラスメートたちはスカートを持っていましたが、叔母がそれを好まなかったので、私は正装を着ざるを得ませんでした。彼らは皆、白、茶色、または青の綿製のニーソックスを履いていましたが、私は彼女が他のものよりも安価なオレンジ色の靴下で作ったものでしのぎました。ゴムバンドで支えて膝上まで履いていたのですが、最大の問題は足がないと足首まで届くことです。その上に袖口付きの短い靴下を履いていました。私はすでに十分に疎外されており、服装でも目立たなければなりませんでした。

5リラで、朝授業に入る前に履くもっともまともな靴下を買うつもりでした。その日はお店は閉まっていた。叔母が見つけてしまうかもしれないので、お金を持って家に帰ることはできませんで

した。私はラバの足跡沿いの石の下に彼らを隠すことを考えました。夜に雨が降ったので、翌朝取りに行ったときに気づきましたが、紙でできているので完全に崩れてしまいました。

15日経ち、叔母は私に宝くじが当たったかどうか尋ねました。それでも私は正直にならず、「はい」と言いました。そのお金は決して届きませんでした。聖金曜日、悲しみの聖母を讃える行列の途中、教師に会い、彼は朔月を求めた。私は恥ずかしくて死にそうでした。当然叔母は何も知らないで、厳しい視線を浴びながら叔母から二発の平手打ちを受けました。私はいつも喜んで学校に行きましたが、成績は良くありませんでした。誰からも理解されず、推薦で昇進することも多かったので、母はいつも私に勉強をさせると平気でした。私は猫だけで大丈夫でしたが、ある日、酔っぱらったおじさんが胃袋を持って町から戻ってきて、その猫が自分の餌として猫の一部を食べ

てしまいました。彼は兵士たちが残したマスケット銃を手に取り、田園地帯で彼を殺害した。それは私にとって大きな失望でした。

脱穀の時間になると、私は近所の農場の庭に残っている小麦と大麦の粒を拾いに行き、袋に入れて川沿いにあるティンダラ夫人の工場に持って行きました。それから私はその小麦粉をノバラの母のいところに持っていきました。母は未亡人で幼い子供が二人いて、朝森に薪を集めに行き、オーブンに火をつけて小麦粉を持ってきた人たちにパンを準備し、お金を稼ぎました。子供たちに少しのパン。

9月、イチジクが熟したとき、私は木に登っておいしい実を摘み、枝にフックで吊るしたサトウキビのバスケットに入れました。イチジクは切り取られ、天蓋の上で天日で乾燥させました。数日後、乾いてきました。大きなカゴに植えて冬に食べました。その美しい時代に、田舎から隣人のマリア夫人がドライイチジクを準備しに来ました。私はよく彼女に会いに行きました。彼女はたくさんの子供たちの母親でした。そのうちの一人、カーメロはてんかんを患っていました。時々、彼はもう見つからなくなりました。心配した母親が探しに行ったので、私もほとんど楽しみながら付き添いました。

私が5年生のとき、先生は私たちを両親に映画「The Little Alpine」を見に映画館に連れて行ってくれと言ってくれました。おじさんたち：「そんなゴミを見に行くんじゃないよ。」向かいの司祭の甥は「彼女を送らなければなりません。私も彼に会っていません。」と聞いたそうです。その後、彼らは移動し、私は行くことができました。

母親からお菓子の入った荷物が届いていた。学校にもいくつか持ってきていました。当時は飢餓の時代で、お菓子さえも不足していました。私が5年生のとき、先生の妹が4年生を教えていました。彼女は病気の私より貧しい小さな女の子にお菓子をくれと頼んだので、私はすべて彼女に残しておきました。

1945年に父はドモドッソラに戻りました。1946年4月に私は再び彼に会ったが、彼と一緒にいたのは赤ん坊を待ち望んでいた私の母だった。

私は両親と一緒に約10日間幸せに過ごしました。祖父母や叔父の家によく遊びに行ったので、好きなだけ食べて、祖母が売っていた炭酸飲料をたくさん飲みました。結局、母は私を北イタリアに連れて行きたかったのですが、いつも嘘つきで利己的な叔母が、私を残してくれるよう説得してくれました。私は小学5年生で、自分の傷つきやすさを考えるといつも苦労していました。受験時代に弟誕生の知らせが届いた。とても嬉しくて、でも同時に悲しくて、嬉しさと辛さで泣きました。そのためか、試験中に私が口を開けなかったにもかかわらず、先生は私を昇進させました。その年、彼らは村に高校セクションを設立し、私のクラスメートのほぼ全員がそこに入学するための入学試験の準備をしていました。私にとってチャンスはありませんでした。私の叔父たちは、フクロウだけがそのような学校に通うものだと思っていた。実際、彼らは高校を卒業すると、修士号を取得するためにメッシーナに行かなければなりませんでした。両親は本の代金を送金することを考えなければなりませんでした。そうすれば出費はありませんでした。私は勉強を続けたかったので泣き続けました。そして、彼らは私に、2年間続く非常に貧しい中学校のような、2年間の専門課程に入学する機会を提供してくれました。最も貧しい人々がそこに行きましたが、いずれにしても私は受け入れました。午前と午後を行ったり来たりしながら講座に参加しました。学校はさまざまでした。最も乱暴な男性が数学を教える校長に対して手を挙げ、イ

タリア人とフランス人の教師をつまづかせました。女子には家事を、男子には農業の知識を教えた。実際には、私たちは何も学びませんでした。内気で学習意欲が旺盛だった私にとっては、良い結果になりました。

年度末前に、先生たちは私たちにチャリティー劇場の準備をしてくれました。ストリートウニの格好で登場することになった。そこには叔父の帽子があったが、パンツはなくなっていた。私が叔母にそのことを話すと、「債券を立てるなんてばかだ」と怒鳴られました。私は意気消沈しませんでした。私は床屋の妻リーザのところに行き、息子のズボンを借りてほしいと頼みました。それで公演の夜、私は大歓声とそこにいた叔父たちの必死の思いの中、ウニの格好をしました。

残念ながら、その2年も過ぎ、私は自分が以前と同じくらい、あるいはそれ以上に無知なままだと永遠に思いながら学校を卒業しました。

第六章 許してください

(星の光)



8月に母が父と初めて会った弟と一緒に私を訪ねてきたとき、私は12歳でした。彼の小さな顔を見て私は幸せになり、その日は私の人生で最高の日の一つとして覚えています。両親は私を学校に戻るために連れて行こうと決意していましたが、叔母は何度もその考えを思いとどまらせました。両親は私を裁縫師として行かせて、仕事をしっかり学ぶつもりでした。そして、私の意志に反して、それが起こったのです。両親は去り、私は馬鹿みたいにシチリアに残りました。それ以来、私は心の平安がなくなり、いつも人知れず泣いていました。叔父たちは、私の両親が間違いなく私を自分たちほどには愛さなかっただろう、私を娘のように育てた（娘なら間違いなく私と同じ苦しみを経験しただろう）、と言いました。ある日、叔母は町で一番の裁縫師のところへ行き、母もそこで仕事を学んでいましたが、私を雇ってくれるか尋ねました。洋裁師は、すでに8人の女の子がいるので、これ以上増やすことはできないと答えました。翌日、彼女の叔母が彼女を説得するためにいくつかの卵を持ってきて、こう言いました。

1か月後に戻ってきてください、おそらく見習いの一人がトリノに向けて出発する予定で、あなたの姪のための場所はまだ空いています

1か月後、時間通りに叔母が私を研究室に送ってくれました。身長1.5メートルしかない若い女性が私を歓迎してくれました。「分かったね、かわいそうだから連れて行ってあげるよ。田舎にいるより私のところに来た方がいいと思うよ」叔母さんと一緒に。」彼の考えが完全に間違っていたわけではない。次の日、8時に私は現れました。

「研究室の掃除を始めてください」と彼れに言いました、「それから床を洗うのはあなたです。」その話が私には臭くなってきた。できる限りの掃除を始めました。私は身長が小さく、12歳でしたが、見た目は8歳でした。

私は床の洗い方を知りませんでした。田舎では床は石でできていましたが、村ではタイルがあり、叔母は床がすり減らないように決して床を洗いませんでした。頑張ったけど、洗濯が足りなかったんで、お針子さんに「ろくでなし」と言われました。

9時に労働者たちが到着し、新しい大義（少女）に興味を持ち始めた。彼らは皆、哀れみのような目で私を見ました。私は彼らのスピーチを聞いて、人生の本質的なことを知らなかったことに愕然としました。時々彼らは私に裁縫の仕事を与えてくれましたが、それは私がやりたくない仕事で、勉強できなかったことをいつも苦々しく思っていました。その日は良い面もありました。正午、田舎に戻る必要がなかったので、家で静かに食事をし、テーブルにナプキンを広げ、グラス、水筒、皿を並べました。つまり、堅いパンとチーズを食べるために、私は普通の人々と同じようにテーブルを整えるのを楽しんだのです。昼食後、私より9歳年上の裁縫師だった近所の人に会いに行きました。彼女は私の純朴さに目を開かせてくれました。彼女の母親、象の足を持つ姉妹、そしてもう一人の障害者が彼女と一緒に暮らしていた。

時々彼らは私をスूपに誘ってくれました。お針子さんから、子供服のクロスステッチ刺繍を手伝ってほしいと頼まれました。一度、悲しみの危機に陥り、仕事を中途半端に辞めてしまったことがある。またある時は、腹立たしくて、火鉢から灰を取り出して、階段に沿って蒔きました。彼らは言いました：「そこにいるのは誰ですか？病気になるでしょうか？」結局、彼らは私のことを理解し、許してくれました。

時々、私はアントニア・ノ孤児院の修道女たちのところへ行き、孤児たちと遊びました。規則正しく日々を過ごしているので、ちょっと羨ましかったです。彼らはいつもきちんと整えられたテーブルで食事をし、それから遊び、そして最後に決まった時間に祈って神の献身に身を捧げました。私はこう思いました：

幸運なことに、彼らにはもう両親はいませんが、それでも修道女たちと仲良く暮らしていますが、私には両親がいますが、叔父のクマたちと暮らさなければなりません。彼らの知らないうちに、その後の退屈な尋問を避けるために、私は時々、村に住む父方の叔母を訪ねました。私は彼女に、両親に連れて行って欲しいと懇願する手紙を送るためのお金を要求しました。

毎年11月に、彼らは私をピアノ・ヴィーニャで開催されるサントウゴ・フェアに連れて行ってくれました。この場所に父方の祖父母が小屋を構え、そこでグリルした肉やソーセージを調理し、おいしいワインとともに販売していました。私にとって、それは父方の親戚と一緒に過ごし、美味しい肉を味わい、色のついたソーダを飲み、火鉢、ランタン、土鍋、石英、ブンベリを売る屋台を眺める機会でした。

翌日、私たちは再びバディア・ヴェッキアでサントウゴの祝日、ミサ、小さな行列に参加し、それから再び祖父母の店に行き、ソーセージ、パン、ソーダを提供してくれました。これはボールで閉じられた小さな瓶から注がれました。内部で。

一度クリスマスの前に、私たちはメッシーナに3日間行きました。私たちは親戚と一緒に寝ました。私は彼女のことを少し気に入らなかった。彼女は叔父たちに、市場で農家から卵を盗んで気を紛らわせたと話した。私は信仰問答で、盗んではいけないと学びました。夕方、娘と一緒に彫像を作っている紳士のところへ行きました。寛大にも、叔父たちは私にそれらを買うためにお金をくれました。カストラングアの油を塗ったテーブルの上に、キリスト降誕の場面を作り上げることができました。アスパラガスの枝と綿片を使って小屋を作りました。夕方には、オイルに浸したクルミの殻と紐で作った2本のキャンドルを赤ちゃんイエスの隣で眺めて雰囲気を楽しみました。ミケーレ叔父もそのアイデアを高く評価し、私にご褒美をあげようとしてしました。「ヌトイア、ウチワサボテンを2個盗んで」と言って、叔母はウチワサボテンが保管されているベッドの下に取りに行きました。

クリスマスノベナの期間中、私がノヴァーラで一人で寝るために立ち寄ったとき、私は隣人のアントニエッタと一緒に、朝の5時にアヌンツィータ教会で行われる礼拝に行きました。教会の後ろで聖職者が椅子を有料で提供してくれました。私たちは家から持ってきました。帰り道 私たちはエンジニアの洗濯婦であるカロリーナを訪ねました。彼女はすでに早朝から階段の下で働いていました。その時、彼女はすでに大きな石英を使ってサン・フランチェスコの噴水から水を汲みに行き、木製の桶を満たしていました。

「カウシ、ここで待っていてください。昨晚のビスケットが紳士たちに残っているかどうか確認してきますので、朝食を食べてください。」彼は手ふらで戻ることはほとんどありませんでした。私はアントニエッタを誘って、火鉢に火をつけました。カロリーナが他に食べるものが見つからなかったとき、私は堅いパンと「ブン・エロ」水を一杯取りにキッチンに行きました。私たちはドイリーを作るために8時まで止まり、それから別れを告げました。私はワークショップに行き、アントニエッタは8人兄弟の一人娘だったので母親を手伝うために彼女の家に行きました。

ノヴァーラにいただけで、私はまるで市民のような気分になった。トゥーリおじいさんを訪ねたとき、窓を掃除したところ、彼は私に「スレア」（チップ）をくれました。マニキュアを買いに行きました。叔父たちに会うことを察知して、それを除去するための溶剤も購入しました。粉末にはタルカムパウダーを使用しました。悲しいことに、ある日、私はそれを顔に残したまま、平手打ちや侮辱を受けて苦労しました。

「そのゴミを買うお金はどこから調達したのですか？」そして私は言いました、「それが小麦粉だということが見えませんか？」その間、近所の人たちは別の地区に引っ越していました。ある日、彼らは私をサーカスに招待しました。

「お金がないんです...」と私は言いました。彼らはそれらを私に貸してくれました。午後になると、船員たちはショーを楽しむために研究室に行きます。空中ブランコに乗ったサル、小さな馬に乗った子供たち、象、ピエロなど、これまで見たことのないものたちが登場します。残念ながら8リラを買わなければなりませんでした。

数日後、カストランジャに行く途中、サン・サルヴァトーレで、農家から買った野菜が入った袋

を持った同級生の母親に会いました。彼は私に町に戻ってもいいかと尋ねました（当時の精神状態のせいで、カバンを持って広場に行くのが恥ずかしかったのです！）。私はチップでお金を稼ごうと考えて同意しました。残念なことに、家に着くのが大変だったので、彼女は私にご褒美としてピーナッツを

4

個くれました。私は気を失いませんでした。ファンティーナの女性にドイリーを売って1リラを稼ぎました。足と腕が紐で動く段ボール製のピノキオを作りました。数セントで買った子供もいた。もう一つのアイデアは、貧しい子供たちのためのサングラスです。バーの前で透明な色のキャンディーの包み紙を探していました。シュガーペーパーを使って枠を切り出し、残りのお金を回収することができました。2か月後、なんとか8リラを返すことができました。

祖父は高齢にもかかわらず、5歳の頃から喘息とヘルニアを患っていたにもかかわらず、娘がほとんど見舞いに行かなかったため、田舎で気を紛らわそうとしていました。義理の娘がメッシーナから到着した夏の

2

か月間、彼は元気でした。彼女は彼の服を洗濯し、一年の間に溜まったものをすべて取り除くために家をひっくり返しました。

私たちが会ったとき、彼は私にこう言いました。「あなたの叔母さんは恥ずべき人です。哀れな老人を汚物であんなに苦しめることはできません。」夕方、私は報告に行きましたが、叔母は義妹を批判しました：彼女は国民です、彼女は自分の望むことを自分で考えることができます。そして私はこう答えました。「その通りです。私はあなたが掃除をしているのを見ました。小便器も酸で洗ったので、またピカピカになりました。」この時点で、彼は私を平手打ちしました。なぜなら、これらのことは話すべきではなく、私がうんざりしたからです。

ある日、祖父が私にお金をくれたので、私は工房の女の子たちが話していた歌集を買いました。しばらくの間、私はそれを隠すことができたが、ある晩、時間がなく、それに気づいた叔父は悪口を言い始めました：-この醜いゴミでさえ、今ではあなたはいじめっ子になっています。その言葉を聞いて、私は彼が言う前に彼の顔にそれを投げつけました。彼は私の反抗を見失い

、私のズボンのベルトを引きずり下ろし、私を激しく殴り始めました。私が13歳くらいのとき、彼が妻にこう言ったのはこの時だけだった。「ある女性が北イタリアへ出発するということを聞きました。あなたの姪を村まで連れて行って、彼女を両親の元へ送ってください。」その瞬間、私は幸せを感じ、受けた殴打の痛みさえ忘れて、芝生の上に座り、考え込みました。夜の影が木の枝に浸透し、川から軽く冷たい風が吹き上がってきたので、闇が落ち始めていると私は思いました。

私はクルミの木にもたれかかり、雲を眺めながら眠りについた。私はたくさんの夢を見た、色とりどりの夢の群れ。そよ風が私の顔を撫でた。目を開けると、不思議なことにずっと嫌いだっただあの場所が大好きになり、そこが星の光だけで照らされていることに驚いて初めて気づきました。私はこの放棄された状態に自分自身を置き、再び夢を見ました。不思議な液体のような幸せが私の小さな存在に一滴ずつ入ってきました。私は優しい子供ではありませんでした。川の鋭い小石の上を歩いたので足にしわが寄っていましたが、私の体全体、さらには魂さえも、甘くて柔らかそうに見えるものすべてを嫌うことに慣れていました。しかし、その夜の短い睡眠は素晴らしく、二度とそれを見つけることはできなかったと告白します。だからこそ今でも覚えているのかもしれない。突然私の肩に手が置かれ、アントニアおばさんが到着し、彼女なりのやり方で突然私を起こしました。「家に帰りましょう。到着したら、おじさんの手にキスして、「許してください」と伝えるでしょう。」そしてその通りでした。

その夜、私は震えながら床に就き、その夜は眠れず、その日のことを必死に待ちながら何時間も過ごしました。気づかずに眠りに落ちてしまうと、呼びかけか意識の衝撃のように突然びっくりしてしまい、目が覚めていなければならず、痛みを感じ、休む暇もありませんでした。私は残りの時間を目を開けたまま過ごし、夜の闇が壁に描く怪物たちを見つめ、何もする気力もなく、泣いて泣いていました。しかし、それは悲しい叫びではなく、私には認識できない別の何かでした。次の日、私の体は地図のように傷だらけだったので、研究室には行きませんでした。兆候が薄れ始めた1週間後ようやく戻ってきました。

第7章 エミリア



日曜日の午後、私は友人たちと孤児院に行きました。修道女が、関連したジョークを交えながら、福音を親切に説明してくれました。その時間を幸せに過ごせるのは、なんと幸せなことでしょう。ある日、彼はメッシーナの司教が堅信式のために10月に到着するだろうと私たちに言いました。

- この秘跡が欲しいなら手を挙げて、大司祭モンシニョール サルヴァトーレ
アバデッサに伝えます -

どうすればいいのかわからず、私はおずおずと手を挙げました。数日後、私はziziに話しました。彼女は当惑しました。名付け親を探さなければなりませんでした。私は彼女に、郵便配達員の娘で若い教師のリナ先生をプロポーズしました。どうやって彼に聞かせるのでしょうか？翌日、私たちは彼女の家に行き、彼女も同意してくれました。 1948 年 10 月 9
日の午後、私は友人たちと母教会に告白のために行きました。次の日の朝、私は名付け親の家に行き、小さなハートを編んだフィリグリーのブレスレットをくれました。私は喜び始めました。11時に私たちは教会に行きました。司教が到着し、ミサ聖祭を祝い始めました。休憩中、私たちは中央身廊に並び、彼は一人ずつ私たちを確認しました。ミサが終わると、叔父たちはゴッドマザーにコーヒーさえ勧めなかった。彼らは単に彼女を「コンマレ」と呼ぶだけで彼女を迎えました。

子供の頃、私たちがカストラランジャから戻ったとき、村に到着する前に救い主に奉げられた礼拝

堂があったことを覚えています。子子は少しの間立ち止まり、大きな声で「ああ お母さん ああお母さん…」と言った。それは祈りだと思いました。大人になってから、墓地は拜堂のすぐ上にあっただけで、彼は亡くなった母親に電話をかけているのだと理解しました。 zizi

は聖人の祝日にも行かなかったで、私は墓地を訪れたことはありませんでした。その時、人々が「フッサデッロ」と呼ばれる場所でシニョリーノ先生から花を買い、ほとんど行列になって愛する人の墓を飾ったことを私は知っていました。一度、ziziに「お母さんのお墓にも行きませんか？」と提案したことがあります。

彼女は申し訳ないと答えた。 -

花さえも持って行きたくないのに、「お母さん、お母さん」と呼んでも無駄です。 -

これらの言葉を聞いて、彼はほとんど動き始めました。私たちは菊を買いにフサデッロへ行きました。諸聖人の日に、私はトゥーリ祖父に電話して、「母親」、私にとっては祖母ローザの墓に連れて行ってもらいに行きました。戦時中に墓地に落ちた唯一の爆弾で破壊されてしまったので、祖父は最近その墓を再建させたばかりだった。

また戦いに勝ったことを誇りに思っていました、私は昼も夜も両親のことを考えていました。研究室にいるとき、私は気を紛らわせようとした。肩当ての芯を用意したり、炭アイロンを吹きかけたり、裁縫が楽しくなりました。アイロンが熱くなると、大きな女の子たちはアイロンがけをして服を作りました。ぴんと張った状態を保つために、裾には 2

本のリボンの間に重りを縫い付けました。ライフルの材料を売っているゴッドファーザーからそれらを買に行きました。それらはペレットだったので、ハンマーで平らにする必要がありました。時には指を平らにしてしまうこともありました..一方、オーランド夫人は年長の女の子向けに有料のカットコースを開催していました。私は遠くに座っていましたが、レッスンから何かを理解するために聞いていました。かつて、叔父たちは、重要な用事でノバラに来たときに私たちと一緒に寝た「コンマーレ」と「コンペア」を訪問するためにファンティーナに行くと言った。ある時、名付け親ziziに「あなたは何歳ですか？」と尋ねました。そして zizi: -
私の目は真っ暗です、私は覚えていません- (視力がなかったら、私は覚えていません)。

トゥーリおじいさんのアドバイスで、私は緑色の布地を買いに行き、自分の能力を試すためにスカートを作りました。ファンティーナへの出発日がやって来ました（徒歩2時間）。私たちは4時に起きました。スカートを履いてジジを驚かせたかったのです。とても狭くて歩けないほどでした。私の作品を見た彼らはこう言い始めました：

私たちが育てたのですが、今では成長し始めてフクロウのように行動します。それは私たちを恥ずかしく思います。そして私は指摘しました：「私はこれを取り上げません、あなたがこれを望んでいるなら、そうでなければあなたは去ってください！」でも心の中では「こんなタイトスカートを履いて歩けるのか...」と思っていました。とにかく目的地に到着しました。警官は私に、そのような美しいスカートをどこで作ったのかと尋ねました。 - Sa figi illa -

(彼女は自分で作りました) zizi と答えました。 -

それで、何かを縫わなければならないときは、私たちは彼女のところに行きます。フクロウの誇り... -

時々街で悲しい出来事を目にしました。エミリアは聾啞で、おそらくホームレスだった。ほぼ毎日、彼は私が往んでいた通りを通り過ぎました。彼は誰かに会おうと口に手を当てました。時々、パンを一切れ差し出す人もいたが、不謹慎にも彼女にチーズの皮を与え、その反応を見て隠れる者もいた。かわいそうな少女は玄関の段差に座って壁に頭をぶつけた。ある日、糸を買いに店に行っていると、目の見えないアントニオの大きな声が聞こえました。彼は町の頂上にある修道院から、イワシが到着したことを告げた。祖父からもらったチップの数リラが残っていたので、私は数オンスを買うために魚市場に行きました。正午にストーブに炭を入れてイワシを調理し、シュガーペーパーの中に置きました。エミリアが通り過ぎるのを見て、私は彼女にそれらを渡しました。彼女は驚いて彼らを見て、少し微笑んで私に感謝しました。彼女がいつもの戸口に座っていて、壁に頭をぶつけずに、細い指を口に当てているのが見えました。その日、私は何も食べませんでした。叔父たちに私の取り組みを理解されないように、ストーブの残り火を掃除しなければなりませんでした。

アンジェラさんは正午ごろ、障害を持った息子のニノと一緒にその通りを通りかかったが、ジェ

スチャーで話しながらも歩いていた。彼らはバケツを持って孤郎院にスープを取りに行きました。ある日、ニノがバケツを持って一人でいたとき、私の家の近くで二人の少年がニノの服を脱いで逃げました。彼はズボンを引き上げることができなかった。彼は下着を着けていませんでした。私は恐る恐る彼に服を着せるために降りて行きました。裸の男を見たのは初めてだった。不幸なことに、叔父たちが知っていたら、それはスキャンダルになっていただろう。

両親に送ったたくさんの手紙の一つで、私は時計が欲しいという気持ちを表明していました。アゴスティナ夫人がドモドッソラから来たとき、私は彼女に会いに行きました。彼は私を見るとすぐに私を抱きしめ、両親から送られた荷物を私に渡しました。開けてみると、驚いたことに、指ほどの大きさにカールした茶色の子羊の毛皮のコート、フェルト帽、そして時計の入った箱が入っていました。女性がそれを私の手首に置いたとき、私は喜びで震えていました。彼は私が回復するのを助けるためにコップ一杯の水をくれたので、私は走って家に帰りました。翌日、叔父たちがノバラにきたとき、もし私がその毛皮を着ていたら、私が気が狂っていると思われるだろう、と言いました。町では誰もそのような毛皮を持っていませんでした。とにかく誇りを持って着ていました。私は袖をまくり上げて、みんなに小さな時計に気づいてもらいました。ロープを与えることが多かったので、すぐに切れてしまいました。カストランジャに行く途中、何人かの年配の人に会い、時間を尋ねられました。悪い印象を与えないように、私は壊れた修理不能な時計を見て、巻き忘れたと言いました。 - どうもありがとうございます - 。彼らは私に挨拶し、旅を続けました。

友達と比べると、私は小さくて痩せていて、みんな「発達」していました。母は手紙の中で、私が妹のローザのように「発達」しているかどうかをziziに尋ねました。しかし、ジジにとってこれらのことについて話すことはタブーでした。彼は私が人生についてすべてを知っていることを知りませんでした。いつものように反抗的な私は、「栄養失調だから『欠席』じゃないよ」と彼女に言いました。そして彼女： -

何言ってるの？ 私たちはいつもあなたをサポートしてきました。ある晩、私はカストランジャで寝ていて気分が悪くなりました。冷や汗をかきました。もう終わりだと思い、私は祈り、泣き、暗闇の中で数滴おしっこをしに出かけました。そして彼らは、「もう一度起きたら殴るぞ！」と

言いました。おそらくティンダリの聖母が私を守ってくれたのでしょう。私はまた藁布団に戻って眠りについた。翌日、ノヴァーラの研究室でアスンタ先生は私がいつもより青白く見えました。ウェイトレスが毎朝のようにコーヒーと牛乳とトーストしたスライスを持ってくると、私にも分けてくれました。

第八章 ツバメの飛翔



ノヴァーラで多くの時間を過ごしたことで、人生が変わったように思えた。おそらく私がトゥーリおじいさんを訪ねて、午後中ずっと途切れることなく楽しくおしゃべりしたからだろう。彼は自分の人生について、そしてかつて自分の存在がどれほど困難だったかについて、たくさんの話をしてくれました。さらに、ノバラに住んでいると、町で起こった重要な出来事を目撃する機会がありました。何よりも、大規模な宗教行事、行列、洗礼、堅言式、そして何よりも結婚式が私を感動させました。当時、結婚式は夜に行われていたので、私はほとんどいつも友人とサン・ニコラ教会を見に行きました。

ある晩、白いドレスを着た花嫁が父親に付き添われて出かけるのを見ました。雪のように白くて、まるでお人形さんのようで、とても美しかったです。フィリッポと結婚したのはカルメリーナでした。私は完全に共感し、「いつか私にも起こるかもしれない…」と空想しました。

その頃、私は奇妙な感覚を感じ、空気中に何か新しくて奇妙なものがあり、予感がありました。私は落ち着かず、異常な出来事が起こるのを待っていました。そして実際、イベントは間もなく

始まりました。正午頃 郵便配達員がいつもやって来ました。

6月のある日、「カンポ 郵便物だ」と叫ぶ彼の声が聞こえた。私は手紙を受け取りました、それは..ドモドッソラからのものでした！母親は私に手紙を書きました。

突然、破りそうになるまで開いて読みました。そこには 私がずっと待っていたニュースがありました。9月12日頃 母がシチリアに来て私を迎えに来て、北へ連れて行ってくれるということです。今では私は若い女性になっており、将来が私を待っていて、仕事を探さなければなりませんでした。叔母がどんな反応をするかを知っていたので、私は用心深く、ガラクタの海が入っている瓶の底に手紙を隠しました。もしジジが読んでいたら、可哀想に..ミシェリー叔父さん、彼が読んでいなかったときも時々ありました。村落で働いていたが、ノバラの店にやって来た。時々、彼はziziと一緒に来て、驚いてこう言いました、「あなたのお母さんはしばらく手紙を書いていません、彼女に何か起こったに違いありません..」。一方、私は、何かヒントが書かれた別の手紙が届くのではないかと心配していました。ある日、実際に一人が到着しましたが、幸いなことにシチリアへの旅行について何のほめかしもありませんでした。私にとって夏はゆっくりと過ぎていきましたが、私はその狂ったように待っていたことが終わるのを待ちきれませんでした。仕事のおかげで何も考えずに母が到着するまで時間を過ごすことができました。8月15日の聖母被昇天の祝日に向けて、人々は皆自分の優雅さを誇示したが、研究室ではいつもよりもやるべきことがたくさんありました。多くの女性が新しいドレスを披露したいと考えていました。8月13日は、自分で服を縫うことができる労働者に奉げられました。

友人たちと同等の生地を買うようにziziに頼んでいました。彼女も同意してくれたので、私は青い結び目のデザインが入った安いベージュの生地を選びました。工房の若い女性がカットしてくれて、年配の職人さんに縫ってもらうのを手伝ってもらいました。パーティー当日、私は他のみんなと同じように新しいドレスを着ました。

ファンティーナから来た知人も何人かいた。そのうちの1人は私の有名なタイトスカートを見ていました。彼は布地を持ってきて、ziziに「あなたの姪が私のためにドレスを作ってくれるんで

す。彼女はとても上手なんです！」と尋ねました。私は彼女の寸法を測りました。私はミス・アスタカ顧客のために作ったモデルを念頭に置いていました。カットして試食するために少し時間を置いてもらいました。

「大丈夫です。生地は秋向きで少し厚めです。9月20日頃に行きます。」

一方、研究室の少女カルメリーナは、9月のある夜、マトリックス教会で祝われた結婚式に友人全員を招待した。

ziziさんの許可を得て、式典に出席しました。ゲストの中にはドモドッソラ出身の女性もいて、「コンツェッティーナさん、ノヴァーラでのあなたの命は残りわずかです。もうすぐお母さんが迎えに来ますよ。」と出発が迫っていることを告げた。

豊富な軽食を食べた後、満足して家に帰りました。月日が経ち、ティンダリ祭りは9月8日に到着しました。その年、川を曲がりくねる非常に長いルートは、最初るときほど困難で無限に感じられず、飛んでいるように感じました。カストラランジャに戻ったとき、私は zizi に、「研究室は12

日まで閉鎖される」というでっち上げの言い訳をして、数日間滞在することを伝えました。その朝、私の心臓は動悸していました。私たちは近所の人に持っていくイチジクをいくつか摘み、ノバラへ向かいました。その途中で、母がラノ道を下っていくのを遠くから見ました。私は彼女に向かって走り、小さな腕に力を入れて彼女を抱きしめました。ジジは「なぜ突然来たの？コンツェッティーナを連れて行けると思う？」と叫び始めた。

「はい、母親は答えました。私たちは3日後に出発します。」

「無理ですよ、ファンティーナのお嬢さん用にドレスを用意しないといけませんよ」それは私を引き留めるためのもう一つの言い訳でした。彼は絶え間なく叫びました。私は無表情で指で空に触れていました。私の唯一の後悔は、トゥーリおじいさんにもう会いに行けなかったことだろう。

14日の夜は夕食をとりました。ジジは口を開いて母を侮辱するだけだった。「よくも母を私から

引き離すなんて、あなたには心かないの。あなたは私をあまりにも苦しめます。私はもうあなたを妹とは思っていません。」涙を流すミシェリー口を初めて見た。木のような荒々しく硬い殻の下には、明らかに人類の一部が閉じ込められたままだった。一方、私は大理石のように冷たくなっており、まったく感動しませんでした。

夜は一睡もできず、何千もの考えが頭の中で混沌と交錯し、出発する朝が来るのが待ちきれませんでした。母親は「カウジ・イ・ルピ（狼のズボン）」というあだ名の紳士にタクシーを注文していた。夜が明けて、私たちは起き上がり、段ボールのスーツケースの最終仕上げをして、叔父たちに別れを告げました。家を出るとき、叔母は髪を下ろして泣きながら部屋から出てきて、母の足元に身を投げて懇願しました。お願いです、あなた、ひざまずいてお願いします

彼女は言いました

私はただの可哀想な女です、孤虫で、偽りの夫に獣のように扱われます、誰も私を愛してくれません。私の妹、私はあなたに彼女を連れ去らないでください。私、憐れんでください、あなたには私を放っておく権利はありません、彼女は私たちの中で花のように成長しました、そして今では感謝の気持ちはありません！」

髪は乱れ、顔には泥が滴り落ち、彼は地面を叩き、全宇宙を呪った。母は妹が危険な状態になって正気を失いかけているのを理解し、焦っていました。しかし、彼女は動かず、哀れみに心を動かされることもせず、彼の妄想には耳を貸さず、遠くを見つめてドラマが終わるのを待った。叔母は母が頑固であることに気づくと、私たちに最後の別れを告げずに部屋に駆け込みました。突然私たちが立ち去ると、彼女は悪態をつきながら通りに戻ってきました。私たちが立ち去ると、彼女が石に容れ込む小さな黒い球になるまで縮んでいくのが見えました。おそらく私は彼女に対して残酷だったかもしれませんが、子供だけが知り得ることですが、母の手に守られながら彼女の家を出たとき、彼女が私の目から消えようとしているのを見たとき、私のすべての恨みが突然愛情に変わったのを覚えていますそして私は彼女に同情の念を抱きました（後で知ったのですが、彼女は数か月間、私が死んだかのように路上で泣いていました）。

ベルトラミ広場でタクシーのドアが開いた。私は街の端まで窓から会う人全員に手を振りました。旅の途中、私はゆっくりと視線から離れていくパノラマと田舎を胸を痛めながら眺め、海が見えるまで長い間沈黙を続けた。もう、私はノバラからはもう遠く離れていました、決定的に！相反する考えが心の中で葛藤し、それを制御することができませんでした。そして、母が私を撫でて、到着したことを警告したときに目が覚めました。それから私は、自分が送った悲しい人生のせいで、長い間大嫌いだったその国を激しく愛するようになりました。ヴィリアトーレ駅では大混雑が起き、私たちのような多くの人が鞆ボールのスーツケースやその他のバッグを持って北へ向かって出発していました。

海からの弱い風が吹いて、唇に塩の風味が感じられました。初めて感じた美しい感覚。私たちは電車を30分待ちました。私にとってそれは新しい空気でした。人々は「先生、鶏が洗か卵が洗か教えてください」という流行歌を歌いました。誰もが大陸での休暇から戻ってきました。メッシーナに到着すると、フェリーボートに乗り込む馬車を見て驚きました。

9月中旬、海峡の上空には何千羽ものツバメが旋回していました。彼らは逃亡とともに、最終的に家族と一緒に暮らすために戻ってくるという私の夢を刺繍していました。私はその明るい背景の中心に神様を見ようと努め、たとえ見えなかったとしても、小さな魂の底から神様に感謝しました。数え切れないほどの時間の後、私たちはローマで下車し、さらに何時間も待った後、ミラノ行きの列車に乗り、そこでまたドモドッソラ行きの列車に乗り換えました。それは夢でした。その電車の中で、母は何人かの知り合いに挨拶をしました。誰もが彼女がどこから来たのか、一緒にいた女の子は誰なのかを尋ねました。彼らは彼にもう一人娘がいることを知りませんでした。

私は風景を観察しました。マッジョーレ湖と島々、そして山々を不思議に思いました。山に囲まれた谷間の町であることを知っていたので、到着までどのくらいかかるかを尋ねました。私たちは朝遅くにドモドッソラに到着しました。空は灰色で、街路も暗く塗られているようで、人々は地面を見つめながら決然とした足取りで歩き、服さえも黒ずんでいました。駅ではお父さんが、2年前にシチリアで会った弟と一緒に私たちを待っていました。キスと抱擁。家に帰りながら、私は

すぐに私の街となる場所を見つけようとしていました。家の窓を数えてみましたが、数が多すぎて計算を忘れてしまいました。窓が多すぎて、家が重なりすぎていました。あまりに高いので、目が空に消えてしまいました。

めまいを感じました。何千もの疑問が私の頭の中で湧き上がり、せっかちになって去っていきました。旅の間、私は一言も話すことができませんでした。そして家で、写真でしか覚えていなかった姉妹たちを見たとき、また驚きました。もう一つの驚きは、シンク、蛇口、ガスコンロのあるキッチンでした（ノバラでは家に水がなく、私たちは薪で調理しました）。夕方、コマーレ・グラツィアさんが娘のカテリーナさんを連れて私たちを訪ねてきました。近所の人たちも私に会いたがっていました。次の晩、父が私を映画館に連れて行ってくれました。私の人生で最も美しい夜の一つは、最後の日まで永遠に覚えているでしょう。私はついに父と一緒にになりました。以前は、不在の父親を愛するように父を愛していましたが、今では父を賞賛し、ついに初めて、自分が父のお姫様であるかのように守られていると感じました。一言で言えば、雲の上を歩いているような、宇宙の別の地点に降り立ったような気分でした。

第九章 天国への扉



シチリアを発つ前に、母は私に毛皮屋での仕事を見つけることができ、2日後には私に付き添って仕事に行きました。私たちは朝早く家を出ました。このニュースを聞いてとても興奮しました。

入り口で私を出迎えてくれたのは、満面の笑顔で私の手を握ってくれた、感じの良いフレンドリーな女性、ティルデさんでした。ティルデはミラネーゼで私に言いました。「こんにちは、ベラ・トゥサ（女の子）、来て、私と一緒に働く女の子たちを紹介しましょう。ネラとテレジーナです。彼らは豊富な経験を持っています、彼らはあなたに仕事の仕方を教えます。何か問題があれば、恥ずかしがらずに聞いてください」と彼女は付け加えた。それで、あっという間に新しい仕事に就くことができました。

私はすでに大人になったと感じていましたが、ベラ・トゥサの人生におけるこの変化を記念して、彼女に初めて生理が来ました。彼女はその話題についてはあまり知りませんでした、ノバラの年上の友人たちから聞いた話から、これが人が若い女性に変身する方法であることを理解して

いました。彼女は、自分が女性であるためにそのようなシグナルは必要ないことを理解していました。彼女が学んだこと、知っていること、愛したすべてのおかげで、すでに女性であることができました。それはもはや芋虫ではなく、蝶へと変態を遂げていた。彼は遠くからやって来て、数分で一つの世界から別の世界へと移りました。彼女は自分が孤虫であることに気づき、それをもとても誇りに思っていました。

その間、私は新しい仕事に慣れ始めていました。当時、毛皮の襟はコートに取り付けるために使用されていました。皮をスポンジで湿らせ、最後に四方から引っ張って木の板に釘付けしました。シチリアの研究室でリードを潰して服の裾に付けたときのことを思い出しました。ここでも指を叩く音がありました。少しでも日が当たれば、路上にある庭で乾燥させていたので、私は貴重なペルシャ産の子羊、キツネ、ミンク、ネズミのムスクの皮の見張り役をしなければなりませんでした。私は彼らの世話をしながら、行き交う車や人々を眺めるのが好きでした。車の排気ガスを吸い込み、都会の香りに浸ろうとしたこともありました。それは純粋な空気の中で育った少女にとってとても新鮮で、夢中にさせるものでした。目の前を街が通り過ぎてしまい、時間を忘れてしまいました。父は、そこでは一日が数時間に分かれていたが、カストラランジャに住んでいたときは太陽の昇り沈むことしか知らなかったと説明してくれました。私が波の手入れをしていると、時々上の階から年配の女性が付き添いに来てくれました。彼は厳格なピエモンテ語で話しましたが、私には何も理解できませんでした。「なんて美しい冗談でしょう、da ndua ti vegnat (どこから来たの)? Cuma ti se ciamat (あなたの名前は何ですか)?」。私が変える。「ティ・ミ・カピサット・ミア (分からない?)」。皮が乾いたら、ティルデさんは注文した裁縫師のために首の形を切りました。

少しずつ、フリセリーナの芯の付け方、その周りのループの付け方、そして裏地の付け方を学びました。私の能力のおかげで、私は毎週小遣いを受け取るようになり、すぐに年金マークに準拠するようになりました。年をとったように感じました。研究室にはラジオがあり、歌を聴くのが楽しかったです。当時冷蔵車は一般的ではありませんでしたが、若い女性はアイスボックスを所有しており、荷車で町の通りを通りかかった紳士から提供された氷の塊をその中に詰めていました。このような新鮮な水を飲むのは私にとって初めてでした。安い薪ストーブが家を暖めていま

した。彼は電話を持っていませんでしたが、顧客に電話する必要があるときは、数人の従業員を抱える建設会社のオーナーである叔母に私を送ってくれました。その中で、偶然にも私は初めて見たのですが...これはまた別の話で、時間があればまたお話ししたいと思います。

家ではよく食べ、夕方には石造りの屋根や美しい窓のある店のある市内中心部を訪れました。土曜日、私は正午頃に仕事を終えて、中心部のかなりの部分を占める市場に母と一緒に行きました。コートを作るために生地を買いました。市松模様でした。私はクリスマスの真夜中のミサで気取ってそれを始めました。一言で言えば、幸せな人生です。

カーニバルがやって来ました。私たちは親しい家族とともにガレットィ劇場での大晦日のパーティーに出席しました。燐光の光の中で仮面舞踏会を見るのは夢でした。

次の土曜日、朝起きたとき、何か様子がおかしい。母がサンペレグリノマグネシアをくれなかったのので、私は立っていました。彼のいとこがマルティニーからやって来た。彼は私たちと一緒に昼食をとりました。午後になると、私の幸せが終わりを迎えるような不思議な気分になりました。父は彼のいとこに付き添って電車に行き、それから私たちは夕食をとりました。

その夜、私たちは措妙に出かけませんでした。お父さんはお母さんに、「バーにいる友達を訪ねるつもりだよ」と言いました。午後10時頃、彼は胸の強い痛みで怯え、青ざめた顔でうめき声とあえぎ声を上げながら帰宅した。

「テレサ、カモミールを作ってください。」父がベッドの上で息を切らしている間、私は叔母と走って50メートル離れた医師を呼びました。彼はすぐに来ましたが、その間に父は息を引き取りました。後で、大動脈が破裂したことが分かりました。とにかく何もすることがなかったでしょう、お父さんは天国の扉を通して天国に飛びました。それは1951年2月17日のことでした。私は一晩中、父の無力な体を見つめ続けました。私の頭はめまいと偏頭痛が入り混じり、ほとんどその部屋から連れ去られそうになりました。そこでは、不当な死の目撃者だったため、すべての物が憎悪に満ちたものになっていました。私は父のこと、そしてドモドッソラで私を待っていた

過酷な運命のことを考えずにはいられませんでした。涙が枯れ果てていたため、私の目からはもう涙が溢れてきませんでした。メッシーナ海峡のまばゆい光の中で出発するときに私が想像したあの神はどこに隠れたのだろうか？なぜ彼は私たちを見捨てたのでしょうか？なぜ彼は私をそこまで騙したのでしょうか？父親を見つけた今、なぜ彼は私から永遠に奪われたのでしょうか？この悲劇の意味は何だったのでしょうか？ここドモドッソラの神は、今までとは違った、遠く離れた、とらえどころのない存在に見え、暗闇でできていて、捉えどころがなく、掴みどころがなく、苦々しい神であるように思え、再び信頼すべきか、それとも残りの日々を無視すべきか、もはやわかりませんでした。私は夜も夜も沈黙を続け、暗闇の中で目を凝らして見守り、夜が明ければすべてが以前の状態に戻ることをほとんど望みました。家族が渾っふちにいた苦悶の日々の中で、私は天国は小さな女の子の居場所ではないことを理解しました。

そのうちの、早朝、私は倒れ、苦しみの眠りについた後、甘い夢の中に沈みました。気がつくと湖の上にはいたのですが、そのとき父が目と顔を天の光に浸して私に現れました。今では彼の顔はもう痛みを感じなくなり、再び美しくなりました。彼は私に優しく微笑み、私の手を取って抱きしめ、話し始めました。

「私の子供よ、彼は言いました。私が今あなたに伝えたいのは、私の愛、私があなたに望むすべての良いことです。事情により、私たちはお互いのことを知りません。あなたの成長を見られなかったことが残念です...」。

時々、あの夢と最後の旅のことを考えます。主がいつ私を呼んでくださるかについて考えます。私が天国の扉を渡るとき、父が私を天国へ連れて行ってくれたあの晩のような服装で私を待っているだろうと想像するのが好きです。映画

彼とは、お互いに伝えたいことがたくさんありますが、あの寒い
2
月の夜に中断された会話を永遠に再開しなければなりません。それが私の最後の旅を始める最良の方法だと思います。

母親は

人の子供を抱え、父親はただの靴屋だったので年金もなく絶望的な状況に置られました。世界中のすべての寒さとすべての痛みが、私たちの貧しい移民家族に降りかかりました。

土地からも、生活からも遠く離れた私たちは、砂漠の風に引きずられる砂粒でした。

私の母は自分自身を失い、魂全体を失いました。彼女は抜け殻になっていた。彼の体は木片のように収縮し、体重の減少が止まらず、失われた視線は、青白く無表情な顔で、何分もの間、遠くの点、父親の墓に向かってじっと見つめられ続けた。彼女は忘れられないことに取り憑かれた幽霊のようになっていた。彼女が出口のない絶望に陥ってしまう瞬間を私は感じた。私は彼女を揺さぶり、元気つけようと話しかけました。信じられないことに、立場は完全に逆転していた。娘が母親を慰め、夫のいない人生に備えるための物語を語り、母親が忘れられるように助けたのである。長女の私はまだ15歳になっていませんでした。

夕食後、私はさらに数セントを稼ぐために毛皮屋の仕事に戻りました。希望の灯を絶やさないように努めていたのは私だった。でも結局、母はどうやって、おそらく絶望の強さで、一度泣き叫ぶ間に全世界を背負って、ゆっくりと裁縫机に戻り、数枚のスカートとガウンを縫ったのかわかりません。

第十章- 美しいトウサ



同じ年の5月に私の弟が麻疹にかかり、私も子供の頃に麻疹にかかったことがありませんでした。私がベッドにいるときに、母がドアを開ける音が聞こえました。誰かが呼び鈴を鳴らした。その時、ジジとミケリーノの声が聞こえました。私は心配していました。以前は両親に会いに私をドモドッソラに連れて行ってくれなかったのに、今では両親が現れました。彼らは一週間ほど滞在しましたが、私がシチリアと一緒に戻ることを望んでいたので、少しがっかりして帰ってしまいました。

11月に黒縁取りの手紙が届いた。母親は驚いて、開けたときに手が震えていました。私は彼女が泣くのを見ました：ジジは祖父トゥーリの死を発表しました。

11月8日、ボルドナロの田園地帯で彼が死亡しているのが発見された。彼は87歳でした。翌年、さらに大きな失望が起きた。調査の結果、偶然、発掘中にハンカチを喉に当てた窒息が死因であることが判明した。この犯行は、女性が田舎の隣人である兄とともに、年金1万1000リラを盗む目的で犯行に及んだものである。その後、彼女は共謀罪で24年間服役し、彼は12年間服役した。

。

私は悲しみ続けました。お金がなかったので、5人ではやっていけませんでした。ティルデさんは私に、職業安定所に登録できるように偽装解雇を受けるようアドバイスしてくれました。仕事がないかよく確認しに行きましたが、希望はほとんどありませんでした。1953年4月に、工場で女の子を何人が雇ったことを知りました。彼らの父親はすでに仕事を持っていたので、彼らにはそれが必要ではありませんでした。そこで私はオフィスに抗議に行きました。「私は他の人たちよりももっと働く必要がある」と。

5月に私はついに、ゴムバンド、靴ひも、リボン、電線用のチューブラーを生産する工場に入りました。週6～13日と13～21日のシフトでハードワーク。合間には、給料を補い、母を安心させるために毛皮屋にも行きました。

8月がやって来ました。休暇中、コマーレ・グラツィアさんは年長いた母親に会いにシチリア島に行かなければなりませんでした。私も娘のカテリーナを連れて出発することにしました。私たちは列車でミラノに向かい、それからローマに向かい、夜に到着しました。私たちはシチリア行きの電車を数時間待たなければなりませんでした。



駅では仲間の村人たちを見つけましたが、その中にはノヴァーラの小人俳優、サルヴァトーレ・フルナリと名前は覚えていませんが兵士もいました。グラツィア夫人がベンチで休んでいる間、カテリーナと私は散歩に誘われました。彼らは私たちをエセドラ広場に連れて行き、モッタレッロを食べました。再び生き返り始めたような気がしました。

すでに満員の電車が到着すると、グラツィア夫人は二つの鞆を抱えて急いで乗り込みました。電車は完全に停止せず、彼女は線路の上に倒れ込んでしまった。カテリーナ、私、そして群衆全員が永遠の御父に叫びながら、傷だらけでしたが奇跡的に生きていた彼女を引き上げました。彼女は病院に運ばれることを拒否した。

1時間後、電車は出発しました。正午前にテルメ・ヴィリアトーレ駅に到着し、そこでジジとミケリーオのゲストであるノヴァーラ・シチリア行きのバスに乗りました。

彼らは私たちを主賓として歓迎してくれました。その夜、私たち3人はベッドにいたが、カテリーナと私は一睡もできなかった。グラツィア夫人は苦痛でいっぱいだった。その同じ夜、驚きがありました。何人かの若者がギターとヴァイオリンで私たちにセレナーデを聞かせてくれましたが、ミケリーオおじさんは腹を立てて彼らを逃げさせました。

カテリーナの母親は、ほとんどすべての時間をベッドで過ごしました。彼が外出したのは、10日間で年老いた母親を訪ねるための2回だけだった。午後はクラスメイトや研究室の友達に会いに行きました。ある日、私を抱きしめに来た同級生も見かけました。彼は自転車を手に持っていたので、乗せてほしいとお願いしました。当時、ノバラさんは自転車に乗っている女の子を見たことがなかった。それを知るとすぐに、ziziは私を叱りました。「あなたはフクロウになってしまったのですね。私はそんなことは想像もしていませんでした。」

ドモドッソラに戻ったグラツィア夫人は回復に苦労していました。その秋以降、関節症の痛みが襲いました。彼が勇気を奮い起こしたのは、私も招待されたパーティーに家族と一緒に行ったときだけでした。

私は工場と毛皮屋での仕事に戻りましたが、新しい経験が必要でした。ある日、サン・ジェルバジオとプロタジオ教区を訪れていたとき、ドン・ジュゼッペ・ベネッティが私に近づき、いくつ

かの質問をしました。私は自分の悲しみをすべて彼に打ち明けました。彼は私を励ましてこう言いました。「日曜日の午後に礼拝堂に来てください。そこにはカトリック活動団体のシニョリーナ・ゲルマーナ会長がいて、女の子たちを紹介し、たくさんの良いアドバイスをくれるでしょう。」私はすぐに気持ちが悪くなり、少し恥ずかしがりながらも友達を作り始めました。どうやって話せばいいのかわからないのではないかと心配していましたが、神の助けで最初の困難を乗り越えることができました。私は倉立者のアルミダ・バレリを称賛する協会の新聞を喜んで読みました。彼女のおかげで私の人生は良くなりました。工場のシフトが許す限り、私は7時に朝のミサに行き、そこで私の精神的指導者と考えていたドン・ベネッティに会いました。日曜日、私は教会の前の報道スタンドで一時間過ごすことを申し出ました。その後、彼らは私を ACLI 評議会に参加するよう誘ってくれました。これらすべての取り組みによって、私は重要性を感じ、達成感を感じました。

工場の同僚たちは私のことを偏屈だと思っていましたが、私は不快には感じませんでした。実際、勤務開始前に更衣室で彼らが下品な言葉を言ったときは、彼らのために祈って呼び戻しました。

第11章- 磁器の顔



ある夏の日曜日、ドイツ・カトリック運動の会長は山への旅行を企画した。残ったわずかなお金で旅行代金を支払うことができました。私たちはバスでゴリオに到着し、その後ケーブルカーでアルペ・デヴェロに到着し、その後徒歩でクランピオーロに向かいました。私はシャクナゲ、キンポウゲ、野生の蘭などの花で覆われた山の美しさを思い巡らしました。ご馳走になるブルーベリー。石造りの屋根と木製の窓があり、その窓辺には鮮やかな赤とピンクのゼラニウムが吊るされていた。私はゲルマナに道の行き止まりを尋ねた。

「疲れたら、お弁当を食べに立ち寄ります。」午後1時頃 私たちは岩から谷に向かって流れ出るきれいな水を飲むために立ち止まりました。食事をし、祈り、歌を歌った後 私たちは別荘に出発しました。私は喜びに震えていました。これほど素晴らしい一日を過ごしたのは初めてでした。家で母にすべてを話したら、母の笑顔が見られました。

時折、シチリアのノヴァーラ出身の友人からメールが届きました。会うためにドモドッソラで仕事を探してほしいと頼まれました。とても戸惑いましたが、誰かが私を好きになってくれて嬉しかったです。ドモドッソラ出身の男の子もいましたが、私は彼が好きではありませんでした。彼は朝、グラッパを一杯飲み、いつも頬を赤くしていました。

朝の瞑想は私に修道院への道を教えてくれましたが、同時に私は子供たちと家族を始めるという考えが好きでした。私は神の御心に身を委ね、日曜日の午後を礼拝堂で友人たちと毎週の公教要

理の計画を立てて過ごしました。日曜日には、私たちは近隣の町の礼拝堂に行きました。バスでの移動は不安だったが、小さな苦しみは勇気で乗り越えた。

1954 年 5 月 1 日、ACLI と礼拝堂は旅行を企画しました。午前中はマドンナ ディオロパの聖域への巡礼、午後はビエッラで牧師による集会が行われました。私は、友人とそのボーイフレンドのピエリーノと一緒に最初にサインアップしたうちの一人でした。若者を乗せたバスが2台残った。その中にはどこかで見たことのある内気な金髪の少年がいた。それは彼でした。私が毛皮屋の顧客に電話しに行った建設会社の労働者です。ピエリーノは彼を私に紹介してくれました。彼は彼のいとこです。日中、彼は私から視線を離しませんでした。家に帰ってから母にそのことを話しました。次の夕方、私は一階の部屋の小さなバルコニーの下で彼を見かけました。

「お母さん、お母さん、来て見てください。ビエッラで会った男の子がいるよ。」そして彼女は半笑いでこう言いました。「彼があなたに求愛しているのは明らかです。」次の晩、近所の人と一緒に出かけたところ、目の前に彼がいた。彼女は恥ずかしそうに、私たちと一緒に来てもいいかと尋ねました。少し不安ながらも引き受けました。私たちはあれこれ話してアイスブレイクをしました。工場での午後の勤務が終わると、彼は私を家まで送ってくれました。ある晩、私は彼を母親に紹介するために彼を連れて行きました。母親は彼をととても歓迎してくれました。自由時間には彼は礼拝堂に出席した。その後、男の子と女の子は引き離され、会議の終わりにのみ会うことができました。私たちはACLIの会合にも出席しました。

母はシチリア島出身で、愛し合う二人の男の子は一人では外出できませんでしたが、私たちを信頼し、私たちは平和な旅を始めました。ギーゼは、父に会ったことがある、と私に話した。子供が4人いて、働いているのは父だけだったので、お金を稼ぐために、少年の頃、家から数歩のところにある兵舎の投資家のために使い走りをした。時々、父は車を修理してもらうために父のところへ持って行きました。喜んで聞きました。

彼は私に別のことを言いました。1950 年 9 月 16 日に私がドモドッソラに行くためにローマを通過したとき、私たちはバーチャルで会いました。私が今でもギウゼと呼んでいる彼は、聖年に自転車に到着していた。冒険的な旅：彼は山靴を履

いて素早くペダルを漕ぐ谷の司祭とともにドモドッソラを出発しました。彼を追いかけるのはほとんど不可能だった。彼はサラダを買おうと野菜畑を見つけたときにだけ立ち止まりました。旅の途中でギーゼは一人取り残された。途中で、彼は古い自転車にジャンクを積んだ露天商を見つけました。彼らはローマまでお互いに付き合い続けました。

8月がやって来ました。工場が休日のため閉まっていたので、私はメルゴッツォ湖畔の丘で療養中の妹のローザを訪ねることにしました。私は家を経営している修道女たちに数日間滞在するように頼みました。私はちょうどこのアイデアをギウスに話したところだった。家には休暇中の他の女の子もいました。その中には修道女の姪の美容師もいる。被昇天の祝日である15日の朝、ミサの後、彼は私たちを練習するために部屋に呼びました。彼は私たちの顔をさまざまなクリーム、マスカラ、口紅で塗りつぶしました。私たちは蠟人形のように見えました。昼食時、修道女の叔母は姪を呼び戻した。彼女が私たちをこのように扱うのは意味がなかった。

午後、窓から湖を眺めていると、ギーゼが出てくるのが見えました。私はその陶器のような顔を見られたくありませんでした。玄関で私を見たとき、彼は私が私であることをほとんど認識しませんでした。私は謝罪し、これは実験であり、他の女の子たちも変身させられたことを説明しました。午後は家の庭を散歩しました。夕方近くに彼は私に挨拶しました。「ドモドッソラでまた会いましょう。しかし、以前と同じようにきれいで新鮮な顔で。」

第12章- ヴィオレット



2週間の休暇が終わると、私は午後1時から午後9時までのシフトで工場に戻り、ボビンを機械のスピンドルに通している間、ギーゼのことを考えていましたが、同時に考えていませんでした。彼に会いたいという強い願望がある。午後9時、サイレンが鳴り、心臓が高鳴り始めました。フォルダーにスタンプを押した後、ゲートの出口で、半暗闇の中に自転車が見えました。それは本当に彼でした。彼は私に近づいてきて、恥ずかしそうに私の顔を見て、「私はあなたがとてもシンプルで好きです」と言いました。彼は私を自転車のチューブに座らせて家まで連れて帰りました。私たちは簡単なおやすみの挨拶を交わしました。これはほぼ毎日起こりました。日曜日の午後、私たちは近くの村をいくつか自転車に乗りました。ある日、彼は私を家に連れて行き、父と母、二人の妹、一人の弟を紹介しました。彼女は少しずつ私に叔父やいとこを友達として紹介してくれました。

母はシルコニーから私たちを見て、私たちを家に上がらせました。彼女はその男の子を溺愛していましたが、私はとても迷っていました。

12月8日、無原罪の御宿りの日、私の聖名記念日に、玄関の呼び鈴が鳴りました。私に赤いカーネーションの花束を渡してくれたのは花屋さんでした。

「お母さん、ギーゼが私に祝福の言葉を送ってくれました！」メモを開いたときはがっかりしました。それは彼ではなく、偶然出会った

14

歳の少年でした。そこには「愛してる」とサインが書かれていました。もしかしたら彼は私が同年代だと思っていたのかもしれない。

クリスマスイブに、ギウスはチョコレートがいっぱい入った大きなカラフルな花瓶とグリーティングカードを持って現れました。私は彼に感謝し、一緒に真夜中のミサに行きました。家に帰ると、彼は私にこう言いました。「明日は家族と一緒に親戚と昼食を食べに行かなければなりません。ボクシングデーにまた会いましょう。」

26日の朝、私は母に「あの子とはもう付き合わない、花瓶を返す、約束はいらない」と言いました。そして彼女は厳しい表情でこう言いました。「あなたは気が狂っているのです。チョコレートはまだ食べていなかったら、できただろうに。」

次の日、ギーセがいつものように仕事から私を迎えに来てくれました。徒歩や自転車のチューブに乗っている道では、私は彼とほとんど話をしませんでした。

1955年の元旦、私はミサに行きました。彼もそこにいて、最終的には家まで付き添ってくれました。玄関で彼は私にこう言いました。「私をこんなふうに苦しめるために、何を考えているのか教えてもらえますか？」すると、彼の目からは一筋の涙がこぼれました。そのわらがラクダの背中を折ったので、私は彼に笑顔を与えました。彼は私にキスをして、こう言いました。「今日の午後、カルヴァリオ山の晩祭に行くために迎えに行きます。晩祭の後、ACLIクラブで映画が上映されます。」私はそれを受け入れ、別れを告げました。家でそのことを報告すると、母は「あんないい子はもう見つからないよ」と嬉しそうに言いました。

午後2時 私たちはVia

Crucisの礼拝堂のあるラバ道に沿ってカルバリーに向けて出発しました。サンクチュアリに到着すると、夕べの歌を歌い、祝福の後、クラブに行きました。映画のタイトルは覚えていませんが、とても退屈だったので、街に戻ってカテナ映画館に行こうと提案し、そこで「ヴィオレット」というもっと良い映画を楽しむことができました。

4月にヴィジェッツォ溪谷とチェントヴァッリ沿いを電車で旅し、私たちは彼の両親と一緒にロ

カルノの花山車祭りに行きました。私たちはギーゼのゴッドファーザーに会い、私を「ガールフレンド」と紹介してくれました。彼はポケットに手を入れ、財布から10スイスフランを取り出し、ジュゼに渡して「よくやった、いつ結婚するの?」と言いました。私たちは顔を見合わせましたが、それについて話したことはありませんでした。

次の日から、私たちは結婚について考え始めました。家でもその話をしました。母は幸せでしたが、同時に経済的な可能性はほとんどありませんでした。少しずつシーツと下着を何枚か買いました。特別なニーズはありませんでした。私たちは小さくて質素なアパートを探しに行きました。私たちは古代のモッタ地区でそれを見つけたので、結婚式の日を9月19日月曜日に設定しました。私は母と一緒にパンザラサ生地店にウェディングドレス用のレースを買いに行き、それを毛皮職人のティルデ夫人に持っていきました。ティルデ夫人はいつも私に愛情を込めて作ると約束してくれました。

私がまだ未成年だったため、市庁舎で母は結婚禁止令書に署名しなければなりませんでした。ギーゼの両親も喜んでいました。教区では、モンシニョール・ペランダが私たちに美しい励ましの言葉を語ってくださいました。「人生が私たちに与えてくれる喜びや悲しみに直面するために、多くの信仰を持って常に謙虚さを保ちなさい。身廊に沿って赤いランナーを見つけさせてあげましょう。」

私たちはいつものように、好意を届ける親戚や友人のリストを準備しなければなりませんでした。ゲストはほとんどいません。ギーゼの母親は「一家に二個」と言いました。徐々に35名に達してきました。証人には、ジュゼの叔父カルメロ、そして私にとっては会議の企画者であるピエリノが選ばれました。結婚式の一週間前に、ドン・ジュゼッペ・ブリアカ率いる男性礼拝堂が私たちのためにパーティーを準備してくれました。フリガ先生は黒板に挨拶の絵を描き、友達の名を書いた巻物を作りました。テーブルにはペストリーやドリンクが置かれていました。礼拝堂でそのようなパーティーはかつてなかった。聖ジェルバシオとプロタシオの大学教会は改修中

で、舗道は瓦礫や石でいっぱいでしたが、何人かの意欲的な女性たちがジュゼッペとコンチェッタに敬意を表して最善を尽くしてきれいにしました。

9月16日、ジジとミシェリーロが到着したが、コンチェッティーナが結婚することになり、もういない父親の代わりにコンチェッティーナが祭壇まで同行しなければならなかったために引越した。

その間、いくつかの小さな贈り物が到着しました：好意を受け取った親戚や友人からのコーヒーポット、コーヒーグラインダー、ロゾリオグラス、ソーサーとカトラリーのセット、ピエリーノと彼の叔父からのキッチンセット。女性カトリック行動は私たちに聖家族のベッドサイドの絵を贈り、アシスタントのドン・ベネッティは銀の装飾が施された素晴らしい緑の花瓶を贈りました。

前夜は長かったです。私は3人の幼い子供たちを残され、財産もほとんどなかった母のことを思い出しました。

「あなたは信仰が薄いですね。人生には常に聖理があると弁論学校で教えられませんでしたか？」と私は自分に言い聞かせました。

19日の月曜日、私は7時に起きました。ティルデ夫人はレースのドレスを着て到着した。彼は私に服を着せ、ミラノで買ったベールを調整してくれました。午前9時にタクシーが到着し、私を教会に連れて行きました。私は話していましたが、大勢の人が私を見ていることに気づきました。母親のオリンピアは第一子の結婚に興奮しすぎていただろうから、ジュセはすでにオレンジ色の花の花束を持って、妹のローザを伴って祭壇で私を待っていた。私はミケリーロおじさんに付き添われて赤いランナーに乗りました。

ミサが始まりました。モンシニョール・ペランダも感銘的だった。励ましの説教、指輪の祝福、生涯の忠誠の誓い、そして式典の終わりの署名を覚えています。帰りがけに、その時私の叔母に

なっていたピエリーノの母親が、カトリック・アクションの女性たちのバッジを私の胸に置きました。





第十三章- 新しい生活



教会での祝賀会が終わると、カステラッツォ通りのグランダッツィバーで軽食が続きました。ゲストとのキスとキスの間に、私たちはピザとペストリーを飲みながら食前酒を飲みました。母と一緒にスーツケースを取りに行った義理のオリンピアとアルマンドに特別な挨拶とキスをし、新婚旅行に行くため12時15分の電車に乗るために駅へ急いだ。

ママは目から涙を流していました。私たちはコンパートメントに入りました。駅長が汽笛で出発を告げ、私とギーゼは窓の外に身を乗り出して最後の別れを告げた。私たちの人生の冒険が始まりました。

フィレンツェに到着したら、毛皮職人のティルデさんに教えてもらったホテルへ向かいました。豪華なエントランスで音楽に迎えられ、執事が私たちを3階の部屋に案内してくれました。私たちにとっては、ダブルベッドで寝ることさえもすべてが新鮮でした。

初日に私たちはこの街を訪れ、二日目はフィレンツェのすべてを一望できるミケランジェロ広場に行きました。私たちは何枚か写真を撮りました。Giuse のカメラは、フィルム 1 本で 8 枚の白黒写真を撮ることができました。

3日目はローマへ出発。ホテルは犠牲を払って節約したお金で十分でなければならなかったもので、より質素でした。私たちは聖年にジュセが見た4つの大聖堂とトレビの泉を訪れるために数日

間立ち寄りました。私たちはまた、シニョーラ・グラツィアが列車の下敷きになった年の有名な夜のエセドラの噴水にも戻りました。

53

いよいよシチリアへ出発する時が来た。長い旅の末、列車はカラブリア州に到着し、ついにヴィッラ・サン・ジョヴァンニからシチリア島が見えました。ジューゼは、フェリーに積み込まれる列車や、メッシーナ港の入り口に浮かぶマドンニーナ号など、その瞬間を味わいました。

母の弟であるカルメロおじさんと妻のガエタナ、娘のロゼッタとアントニエッタが駅で私たちを待っていました。

彼らは私たちを二人の王子様のように迎えてくれました。私たちはメッシーナを訪れて 2
日間滞在しました。子供の頃に見た大聖堂の時計、マドンナ ディ
モンタルト、その他の非常に美しい広場です。

その家には唯一の欠点がありました。夕食の時間になると、叔父といとこたちは着飾って、テーブルに座らずに、「海辺を散歩に行こう」と言ったのです。ギーゼと私は、小腹が空いたので諦めて出かけました。午後11時頃、私たちは家に戻り、叔母が料理を始めました。ある夜、彼は殻に入ったカタツムリをソースの中に入れましたが、大切なのは習慣ではなく愛情です。

3日目、彼らは涙を流しながら私たちを電車まで付き添ってくれました。ミケリーノおじさんはノヴァーラに行くためにタクシー運転手と一緒にテルメ・ヴィリアトーレ駅にいました。ジジ、マリッキアおばさん、ペッピーナおばさんが村で私たちを待っていました。まるでドモドッソラの王子たちが到着したかのようでした。

翌日、私たちは父方の祖母コンチェッタと父の叔父、姉妹、兄弟を訪ねるためにバディアヴェッキアへ行きました。祖母のタバコ屋のある小さな広場には、子供の頃の私を知っている集落の住

民がたくさん集まり、「コンチェッティーナが夫と一緒に来たよ！」と他の人々に声をかけていました。

キス、ハグ、真っ赤な顔。それは私にとって夢のようでした。私が国を離れてからちょうど5年が経ちました。

2日後、私たちはタクシー運転手「Cauzi Lupu」に同行してタオルミーナへ向かいました。正午に彼が私たちをレストランに連れて行き、そこで私たちは白い手袋をして接客されました。ギーゼと私は顔を見合わせてこう言いました。「お金は足りるでしょうか？」土砂降りの中、タオルミーナ、そしてカステルモーラを訪れた後、夕方近くに私たちは疲れていたが満足してノヴァーラに戻った。

翌日、すでにドモドッソラに戻る時間になっていました。新しい生活の約束が私たちを待っていました。



第14章- 私たちの最初の巣

私はすでに 1950 年と 1953 年にドモドッソラへの旅を始めていましたが、まるで初めて旅をしたような気分でした。私は夫婦として新しい生活に向かっていたのです。

フェリーに電車に乗り終えた後、私たちはテラスに上がり、港とシチリア島のマドンニーナがゆっくりと遠ざかっていくのを見ました。

私たちは涙を流しながら馬車に戻り、木のベンチに座りました。当時は寝台はありませんでした。

夜が来ると、私たちは首をぶら下げてうとうとし始めました。時々私たちは立ち上がって窓の外を眺めました。重要な駅では駅長が大声で都市名をアナウンスした。ナポリでは歩道でピザを売る「グアリオーニ」がいました。巧妙なことに、彼らは最初に旅行者からお金を受け取り、その後列車は出発し、彼らにはお金とピザが残されました。

少しずつミラノに近づいてきました。ドモドッソラ行きの電車の中で、私はマッジョーレ湖、オッソラ山脈、石造りの屋根など、5年前に初めて味わった感情を再び感じました。今回は夫のギーゼと一緒に。正午頃、目的地に到着しました。

ジュセ・アルマンドのお母さんとお父さんが私たちを待っていました。それはお祝いだった。もし彼らが鐘を鳴らすことができれば。

母親のオリンピアと簡単な昼食をとり、その後モッタ地区にある新しい保育園で休憩します。翌日、私は工場での仕事を再開し、ギウスは建設現場に戻りました。

私はサポートが足りなかった母のことを思いましたが、スピリチュアル・ディレクターのドン・ベネッティは私に祈るように勧め、多くの人が母を愛していると確言しました。時々、ギーゼと私は昼食のために彼女の家に行きました、そして、彼女はそれを楽しんでいました。一方、私の姉妹の一人は、家族を新たに支える仕事を見つけました。

その後間もなく、私たちは母、母オリンピア、父アルマンドに、彼らが7月に祖父母になることを発表しました。

妊娠中の不快感を感じ始めていましたが、仕事が必要でした。当時、労働者は今のように守られていませんでした。ギーゼは、屋外の建設現場よりも良い仕事を見つけることができました。そこでは、バレルプラグ、羊毛のかせを解くための道具、そして「パウンギ」（木製のこま）などの木製製品を製造する小さな工場でした。生後5か月になると、私たちは生まれてくる新生児用のベビーカーを探して店を訪れ始めました。その幅はいつも玄関ドアより大きく、引っ越しを決意せざるを得ませんでした。

当時は代理店なんてなかったので、あちこちに行って頼んだんです。プロビデンスのおかげで、毛皮職人の工房のすぐ近く、スカパチーノ通りにある家の
2
階にあるアパートを見つけることができました。

短期間のうちに私たちは引っ越しを計画しました。私たちはもはや市内中心部ではありませんでしたが、遠くも無く、私の職場に近かったのです。

月々の家賃は8,000 リラで、私たちのわずかな賃金としては高額でしたが、アパートは明るく歓迎的な雰囲気でした。中庭には、私の情熱である香りのよいハーブや花を育てることができる数平方メートルの土地もできました。

鍵を受け取ったら、部屋を掃除し、キッチンの美しいカーテンとレースのカーテンで窓を飾りました。引っ越しが完了すると、いつも通りの生活が続きました。お腹がどんどん目立ってきました。ある日、同僚が私に産休でいつ家に帰るのかと尋ね、婦人科医に行くように勧めました。それで私は個人的に約束をしました。医師は、あまりにも長く待ちすぎた私を叱りそうになりました。「6か月を過ぎると働けないのに、もう7か月目です。危険を冒したのです。」翌日、書類を会社に届けましたが、その社員からも「甘い」と言われました。

その間、私は母がくれた古いシーツで作ったセーター、シャツ、靴、おむつを編んでレイエットの準備をしました。

私たちはベビーカーも買いに行きました。男の子か女の子かわからず、私が中間色の刺繍を施したシーツを用意しました。つい7月2日の夜、私は破水し、すでにスーツケースに荷物を詰めた状態で、私たちは歩いて病院へ向かいました。私を診察した婦人科医は、ギウスに家に帰ってもよいと言った。陣痛が始まったばかりで20時間くらいかかりました。翌日、私がまだ分娩室で待っている間、彼は産院に戻りました。

ある時点で男の子が生まれ、看護師がそのことを赤ちゃんの父親に伝えに行きましたが、父親は感動で気分が悪くなりそうになりました。

1時間後、彼女は祖父と同じようにアルマンドと名付けられた最初の子供を抱き締めることができました。数時間後、祖父母、叔父、いとこたちにも知らせが届いた。まるで世界で最初の赤ちゃんだったようです。



第15章- 神に感謝します...

産科病棟の看護師たちは、生後数時間でこの血と肉の生き物を私のベッドに連れてきました。彼らはそれを私の胸に当てました。子供の頃、ziziが私に作ってくれた縫いぐるみ人形以外は。

その時の入院期間は一週間でした。家に帰る前に、私たちは病院の教会に行き、司祭からの祝福である「清め」を受けました。

病棟では家に帰る準備がすべて整っていましたが、私の頭はクラクラし始めていました。助産師が私の熱を検査したところ、39度でした。人形と私はさらに2日間滞在しなければなりませんでした。ようやく12日木曜日、ほぼ台って帰宅しました。

15日の日曜日、アルマンドさんは父親のジュゼッペさん、名付け親の友人マリウッチャさん、そして礼拝堂の友人でゴッドファーザーのバジリオさんとともに、新しい車椅子に乗って洗礼台に連れて行かれた。長老たちが迷信に基づいて私たちに家にいるように勧めたので、私はその行事に参加する喜びを感じませんでした。私はちょっとした軽食を用意して満足した。

三人組としての生活はいつもと違いましたが、とてもうまくいきました。ミルクもたくさん飲んで、赤ちゃんも成長していたので、毎週保育園に頻りに連れて行きました。

残念ながら、2か月の終わりに私は工場での仕事に戻りました。当時は保育園などありませんでした。祖母たちはそれぞれ1週間ずつ彼の世話をすることに同意した。

私6時のシフトで働いていたとき、ギウスは出勤前に彼に包帯を巻いて、目的地まで連れて行ってくれました。この子は意識のないところで苦しんでいて、私も一緒に泣いていました。

残念ながら仕事を辞められませんでした。少しずつ、信念を持って、私たちは三人で旅を続けました。最初の食事、最初の一步は素晴らしいものでした。幼稚園の初日、ギウスはついにもっと高収入の仕事を見つけた。数年間、彼は小学校の用務員をしていましたが、その後、調停官のポストに就くために自治体に呼び出されました。

これにより、工場での仕事を辞め、弟が生まれるのを待ちながら子供に専念する機会が生まれました。

1962年8月17日、私たちは第二子の誕生を喜びました。ルチアーノはアルマンドとは対照的に、色白で金髪でした。おとぎ話

26日の日曜日、彼は父のジュウゼ、名付け親のいとこマリウッチャ、そしてゴッドファーザーのジュウゼの弟アントニオとともに洗礼を受けた。今回も家にいなければなりませんでした。産休が終わると、私は二人の美しい子供たちに専念するために仕事を辞めました。

1962 年 10 月 1 日、アルマンドは青いエプロンとランドセルを肩に担いで 1 年生になりました。レオパルディ先生に涙ながらに託しました。

同じ時期に、ドモドッソラ市長はギウゼを呼び出し、市の使者が退職した後も空席のままだった市庁舎の2階に宿泊先を提供した。数日以内に引っ越しの準備をしました。中心部にはすべてのアメニティが揃っていました。夕方、大きな扉が閉まると、私たちは街の支配者になりました。私たちは市長室のバルコニーからデモを快楽に見ることができました。窓からは何世紀にもわたる伝統を持つ市場の一部が見えました。

一方、ルチアーノは最初の一步を踏み出していた。彼は自治体職員のマスコットになっていた。

ギーゼの給料を補うために、私は仕事を発明したかった。私は友人のために窓、ベッド、枕を飾り始めました。噂が広まり、私は「カーテンレディ」になりました。自由時間に、ギーゼはライ

ンの組み立ての準備を学びました。おかげで、私たちはより快適な生活を楽しむことができました。

1968年10月1日、ルチアーノもルイーザ・チェッリ教師のもとで学校に通い始めました。

時間があっという間に過ぎました。夏にはキャンプテントを持ってイタリア各地で休暇を過ごしました。時にはシチリア島、私の故郷まで。

1973年7月、私たちはヴァル・ダオスタでキャンプをしていたとき、私に妊娠の最初の症状が現れ始めました。

1974年2月16日、もうすぐ18歳になるアルマンドと12歳のルチアーノのもとに、妹のダニエラがやってきた。カーニバルの時期だったので、市庁舎のドアに貼られたピンクのリボンを見た人々は、それを冗談だと思いました。教区の司祭は、友人のジアナをゴッドマザーとして、義理の叔父のベニートをゴッドファーザーとして、イースターの夜に洗礼を祝うように私たちにアドバイスしてくれました。

迷言はさておき、今回私も4月13日の夜のイベントに参加してきました。翌日、礼拝堂のレセプションには100人のゲストが集まりました。

ダニエラも成長し、私たちは高齢者になりました。私たちの
人の子供たちは、ステファノ、バージニア、グレッタ、ロレンツォ、レベッカ、レティシア、マッ
テオという7人の孫を生みました。 3

物語は終わります。2015年9月19日、ギーゼと私は結成60周年を祝いました。

私たちは神、聖母、そして私たちを愛してくださったすべての人々に感謝します。



ラ・マツツア・コンチェッタ・マーリオは 1936 年4月18 日にノヴァーラ・ディ・シチリアで生まれた。

索引

1. 父方の家
2. 世界から
3. 砂の上のゲーム
4. 油 co巢 邪悪な目
5. フクロウ
6. Vossiaは私を許します（星の光）
7. エミリア
8. ツバメの飛行
9. 空のドア
10. ラ・ベラ・トゥサ
11. 磁器の顔
12. バイオレット
13. 新しい生活
14. 私たちの最初の巢
15. 私たちは神に感謝します...

